

文禄・慶長の役(壬辰倭乱)開戦初期における 朝鮮側の軍糧調達とその輸送

六反田 豊

I. はじめに

II. 研究の現状と課題

III. 開戦初期における軍糧穀の調達と輸送

1. 宣祖25年(1592)4月～5月(開戦から臨津江の戦い敗北後まで)
2. 宣祖25年(1592)6月～7月(明軍の来援から明將祖承訓の平壤奪回失敗まで)
 - 1) 来援明軍への対応
 - 2) 義州・定州間での軍糧供給
 - 3) 安州以南および黄海道での軍糧供給

IV. むすび

I. はじめに

文禄・慶長の役(壬辰倭乱、1592-98)の際、日本軍の侵略を受けた朝鮮では戦争の遂行に必要な軍糧をどのように調達・確保し、また、それをどのようにして目的地まで輸送していたのだろうか。この戦争の実態を明らかにするうえで、こうしたいわゆる軍糧供給体制を検討することは重要な課題の一つである。

周知のように、文禄・慶長の役に関する研究は日韓両国の研究者によって多方面から進められてきた。それぞれの問題意識や視角の違いから、論点の置き方に多少のずれはみられるものの、これまでにこの戦争の原因・目的や戦況の推移といった基本的な事柄はもちろん、戦争を支えた日本社会の諸勢力の状況、朝鮮側で抵抗の主体をなした義兵の活動実態、来援明軍の問題をはじめとする朝鮮の対明関係、朝鮮水軍の活動、軍事施設や各種の兵器、さらには降倭や被擄人、この戦争が日本・朝鮮・明をはじめとする東アジア諸国の政治・社会・文化等におよぼした影響など、さまざまな分野に関して豊富な研究成果が蓄積されてきている。

しかし、そうしたなかにあつて、戦争期間中の兵站・軍糧問題を論じた研究となると決して活発とはいえないように思われる。この分野の数少ない専論として、まず侵略した側である日本軍の軍

糧供給体制を考察した中野等の研究をあげることができる¹。ここでその詳細を紹介する余裕はないが、中野の研究によって日本軍の軍糧輸送がいかなる制度的体系のもとに実施されていたかが明らかとなった。

ひるがえって、朝鮮側の軍糧問題を論じた研究は、管見の限り日本ではまったくなされていない。一方、韓国ではこれまでこの問題に関する専論として数編の論文が発表されており、朝鮮軍と来援明軍に対する朝鮮政府の軍糧供給体制の実態、および軍糧調達策が朝鮮社会におよぼした影響などの解明が試みられている。

そこで本稿では、まず韓国で発表された軍糧問題に関する主要な論文の内容を検討し、現在までに朝鮮側の軍糧供給体制がどこまで明らかにされ、いかなる課題が今後に残されているのかを確認したい。そのうえで、開戦初期における朝鮮側の軍糧調達と輸送の推移を、主として『宣祖実録』の記述に依拠しながらやや詳しく跡づけてみようと思う。

後述するように、既往の研究では朝鮮側の軍糧供給体制に対する微視的な分析が決定的に不足していると考えからである。戦争の期間中、朝鮮政府内では軍糧調達・輸送に関してどのような議論がなされ、それが実際の政策にどのように反映されたのか。それを、そのときどきの戦況や政治状況に即してみていくことで、この戦争の実態解明にいささかなりとも寄与したい。

対象を開戦初期に限定する理由の一つは、戦争の全期間を考察の対象とすることが時間的・能力的に無理であり、かつ紙幅にも限りがあるためである。と同時に、そうした作業を通じて、いわば不意打ちをくらって態勢の十分に整わないなか、この緊急事態に対して朝鮮政府がいかに対処したのかという問いにも一つの答えを提供できるのではないかと考えるからでもある。具体的には、宣祖25年(1592)4月の戦争勃発から同年7月に祖承訓率いる来援明軍が平壤奪回に失敗して退却するまでの約3か月間を対象としたい²。

¹ 中野等「朝鮮侵略戦争における海上輸送の展開について」(九州大学国史学研究室編『近世近代史論集』吉川弘文館、東京、1990年)、同「朝鮮侵略戦争における豊臣政権の兵糧補給について」(『九州大学九州文化史研究所紀要』第35輯、九州大学文学部附属九州文化史研究施設、福岡、1990年)、同『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』(校倉書房、東京、1999年)など。

² 本稿は2003年9月20日に韓国ソウル市で開催された第二分科会の日韓合同研究集会において発表した原稿(以下、旧稿と称す)に、当日の議論・指摘を踏まえて加筆・修正を加えたものである。大きな修正点は以下のとおり。

①報告の内容により即した題目にすべきとの指摘に従い、表題を「文禄・慶長の役(壬辰倭乱)開戦初期における朝鮮側の軍糧供給体制」から標記のように改めた。なお、旧稿・本稿ともに、豊臣秀吉の朝鮮侵略とそれにとまなう日・朝・明間の戦争を一貫して「文禄・慶長の役」と称したが、これは、第二分科会で定めた研究課題の日本側表記が「文禄・慶長の役(壬辰倭乱)」となっているのに従ったためであり、他意はない。

②旧稿では朝鮮側の軍糧問題に関して韓国で発表された論文3編のみとしたが、孫承詒委員の教示によってそれ以外にも数編の論文があることを知った(後掲註3参照)。現在までにすべてを入手できたわけではないが、可能な範囲でそれらにも目を通した。その限りでいえば、朝鮮政府の軍糧供給策やその実態を論文の主題として論じたものはやはりそう多くはなく、旧稿で取り上げた3編の論文と大差ないと思われる。それゆえ、本稿で内容を検討する論文としては旧稿のままとし、他の論文については註に列挙し、簡単なコメントを付すにとどめた。

③旧稿では、軍糧問題に関する朝鮮政府の措置として文献上に確認できる最初のものを、宣祖25年(1592)5月13日の実録記事であるとしていたが、軍糧関係の記事はそれより以前にも確認できるという孫承詒委員の指摘を受けて、再度『宣祖実録』を検討した。本稿を執筆するにあたり、その結果を踏まえた加筆・修正を行った。

④旧稿では主たる史料として『宣祖実録』を利用し、一部、同書に記載を欠くところを柳成龍『懲毖録』で補った。『宣祖実録』を主要史料として利用したのは、報告が取り扱う時期と対象に限った場合、やはり同書が基本史料

II. 研究の現状と課題

朝鮮政府の軍糧調達・輸送問題については、前述のようにこれまで韓国でそれを直接の考察対象とした論文数編が発表されている³。そのうちここでは、以下の3編についてその内容を検討しよう。

〈ア〉李章熙「壬乱中糧餉考—明兵의 軍糧調達을 中心으로—」(『史叢』第15・16合輯、高麗大学校史学会、서울、1971年)⁴。

〈イ〉金鎔坤「朝鮮前期 軍糧米의 確保와 運送—壬乱 當時를 중심으로 —」(『史学研究』第32号、韓国史学会、서울、1981年)

〈ウ〉金康植「壬辰倭乱中の 軍糧調達策과 影響」(『文化伝統論集』第4輯、慶星大学校附

となると判断したからであるが、報告までの準備期間が短く、同書以外で当然に参照すべき諸史料を十分に活用しきれなかったことも否定できない。本稿では、『懲毖録』の本文、同書所収の芹曝集(巻3)と辰巳録(巻6)、朴東亮『寄斎日録』などを利用して『宣祖実録』の不備を補い、旧稿では論じられなかった点についても新たに考察した。

以上の加筆・修正にともない、小見出しを増やして章番号の書体を変更するなど、章立てにも若干の修正を加えた。また、一々断つてはいないが、明らかな誤りは訂正し、細かな字句や表現についても一部修正を施したところがある。旧稿では別添資料として地図を添付したが、今回新たに2枚の地図を作製し、図1および図2として本文中に挿入した。適宜参照されたい。

³ このほか、朝鮮側の軍糧問題に触れた研究としては以下のものがある(孫承喆氏の教示による)。

①金 弘「壬辰倭乱의 軍事史的研究」(慶北大学校大学院史学科博士学位論文、大邱、1993年)

②金 弘「壬辰倭乱期 軍糧 調達과 運送」(『3士校論文集』第27輯、1988年)

③李章熙「임진왜란중 屯田經營에 대하여」(『東洋学』第26輯、서울、1996年)

④宋亮燮「壬辰倭乱期 国家屯田設置經營」(『韓国史学報』7、서울、1999年)

⑤李炯錫「壬辰戦乱史」上・下(壬辰戦乱史刊行委員会、서울、1967年)

⑥張学根「壬乱初期 明軍 来援과 軍糧論議」(『壬乱水軍活動研究論叢』海軍軍史研究室、1993年)

⑦李錫麟「壬辰倭乱期 李光輪郷兵倡義活動」(『人文学志』18、1998年)

⑧李樹健「忘憂堂 郭再祐 義兵活動 社会 経済的基盤」(『南冥学研究』5、晋州、1996年)

⑨崔韶子「임진란시 明의 派兵에 대한 論考」(『東洋史学研究』11、서울、1977年)

⑩韓明基「임진왜란시기 ‘再造之恩’의 형성과 그 의미」(『東洋学』29、서울、1999年)

⑪韓明基「壬辰倭乱 시기 明軍 参戦의 社会・文化的 영향」(『軍史』35、서울、1997年)

このうち、朝鮮側の軍糧問題を主題に据えているのは②と⑥である。②は未見であるが、①の「IV. 壬辰倭乱期の 軍事運用 4. 軍需運用」の「1) 軍糧確保」および「2) 軍糧輸送」の項を発展させたものではないかと推測される。①の当該項目では文禄・慶長の役全般にわたって朝鮮側の軍糧供給体制の概要が整理されているが、戦局の推移に即した微視的な研究とはいえない。

一方、⑥は文禄の役期(1592. 4～1593. 12)に焦点を合わせて、明軍への軍糧調達に対する朝・明間の論議の推移を追跡し、かつこの問題に関する柳成龍の活動を明らかにしたものである。主として『宣祖実録』に依拠しながら微視的な研究に踏み出しており、注目される。しかし、考察の中心は明軍が本格的に参戦する宣祖25年(1592)12月以降であり、それ以前については簡略な叙述にとどまっている。また、史料解釈の面で疑問な点もある。

ほかに③④が考察対象とする屯田の問題も軍糧調達という点では重要だが、③④ともにあくまでも屯田経営そのものに重点が置かれており、軍糧供給問題を直接に正面から論じた研究とはいえない。その他の論文はいずれも軍糧問題に言及してはいるが、それが主題ではない。なお、③は「屯田經營의 実態」と改題されて李章熙『壬辰倭乱史研究』(亜細亜文化社、서울、1999年)に収録されている。⑩⑪もそれぞれ「명군 参戦과 정치적 영향」「명군 参戦의 社会・문화적 영향」として韓明基『임진왜란과 한중관계』(歴史批評社、서울、1999年)に収録されている。

⁴ 同論文は、のちに「糧餉調達の 実相」と改題のうえ、李章熙、前掲『壬辰倭乱史研究』に収録された。本稿ではこちらを参照した。

これらのうち、もっとも早くに発表された〈ア〉は、副題からも明らかなように主として来援明軍に対する朝鮮側の軍糧供給問題を論じたものである。

筆者である李章熙によれば、明軍来援以前には朝鮮国内の軍糧調達にそれほどの困難はなかった。ところが宣祖25年(1592)12月に明からの援軍が多数朝鮮に入ってくるや、状況は一変した。それまで朝鮮政府は、軍糧不足の問題よりもむしろ熟練した兵力の不足を憂慮していたが、明軍の来援以後は彼らに提供する軍糧調達に従事しなくてはならなくなったからである。

明軍への軍糧供給に関する朝鮮側の負担は、具体的には次の二つに分けられる。一つは、明軍が中国から義州まで持参した軍糧(明穀、明糧)を明軍の進軍に従って朝鮮国内各地に輸送する負担であり、他の一つは、明軍に供給する軍糧それ自体を朝鮮国内で調達する負担である。

李はそのそれぞれについて考察し、前者については、①明穀輸送には義兵や義僧軍までもが動員された、②陸路・海路ともにその輸送過程において多くの困難があり、輸送の途中で多量の損耗が生じていた、③輸送能力の限界から明穀の多くが輸送途上で遅滞した、などの点を指摘する。一方、後者については、朝鮮国内で調達される軍糧は朝鮮官軍より明軍に優先的に供給され、その調達方法には田税穀と貢物作米、奴婢身貢作米、募粟、貿穀、屯田所出の五つがあったとし、明軍への軍糧は辛うじて調達できたものの朝鮮官軍は軍糧の欠乏で崩壊したと述べる。

また、李は軍糧欠乏が戦局におよぼした影響として、①軍糧が不足し、しかも適時に明軍へ調達・供給できなかったために明軍の将帥に不満を生じさせ、彼らに戦争忌避の口実を与えることになった、②当初朝鮮政府は日明間の講和に反対の立場をとったが、国内の糧穀が蕩尽し、民が生計を維持できない状況に至るや、朝鮮の重臣の多くは進行中の講和交渉が不可避であることを主張した、③戦争末期になると、軍糧不足によって朝鮮官軍は解散状態となった、などの点を指摘するとともに、軍糧調達のための募粟官の横暴や一貫性のない朝鮮政府の失策が戦乱中に頻発した民衆反乱の主たる要因となったこと、降倭を用いて女真勢力を牽制しようとする国防計画が糧餉欠乏のゆえに十分な成果をあげえなかったこと、などにも言及する。

〈ア〉は文禄・慶長の役における朝鮮側の軍糧供給問題に正面から取り組んだ本格的研究の嚆矢であり、とくに、明軍への軍糧供給が朝鮮の官民に重い負担としてのしかかっていた事実を史料に基づいて具体的に明らかにした点で重要である。とはいえ、たしかにこの論文によって明軍に対する軍糧供給のおおよその動向は理解できるものの、戦争の推移に沿って朝鮮政府内でこの問題をめぐりどのような議論が展開され、それが実際の政策にどのように反映されたのかは十分に明らかにされておらず、この点で今後課題を残している。

軍糧調達のための各種の方法についても、さらに実証的な研究の積み重ねが必要だろう。また、軍糧調達に重点が置かれているため、輸送方式に関しては概略的な記述にとどまっている。このほか、引用史料の選択が必ずしも適切とはいえない、主張の一部に明確な論拠が提示され

ていない、などの問題点も指摘できる。

次に〈イ〉は、朝鮮時代の軍糧調達とその輸送に関する金鎔坤の一連の研究⁵の一つであり、文禄・慶長の役における朝鮮政府の軍糧供給体制の内容とその推移を戦争の全期間にわたって明らかにしようとしたものである。

金はまず予備作業として戦争直前の朝鮮の国家財政状況を検討し、当時の国家財政は戦争遂行を不可能にするほどに深刻な状況にあったことを指摘する。そのうえで、戦争期間中における軍糧の調達と輸送の実態を、第1期(1592.4-1593.9)、第2期(1593.10-1596.8)、第3期(1596.10-1598.12)の大きく三つの時期に分けて考察する。

ちなみに第1期は、宣祖が漢城から義州に移り、次いで日明間の講和交渉が進むにともない日明両軍が一部兵力だけを朝鮮に残して撤収するまでの時期、第2期は、宣祖が漢城に戻り、慶尚道南部の一部地域を除いては戦闘が行われなかった暫定的な小康期、第3期は、日明間の講和交渉が決裂し、日明両軍が再度朝鮮に到来して以後、日本軍が撤退するまでの時期、にそれぞれ相当する。

各時期ともに朝鮮政府の軍糧調達・輸送政策の推移が時系列に沿って詳細に論じられており、論点も多岐にわたっている。それを短く要約して紹介するのは容易ではないが、金自身のまとめに依拠してごく大雑把に整理すれば以下のようなようだろう。

【第1期】開戦当初の軍糧確保の目的は、戦争遂行に必要な駐屯兵士の軍糧調達と、敵を攻撃する際に必要な行糧や騎兵に付随する馬料などを遅滞なく迅速に確保することにあった。そして、宣祖25年(1592)12月に来援明軍が義州に到着したのちには、彼らに供給する軍糧の調達にも腐心した。朝鮮は明軍の軍糧は明本国で責任をもつことを求め、これにともない明からの軍糧が義州・平壤などに陸路・水路によって到着したが、宣祖26年(1593)1月以降、これら明糧の輸送が大きな問題となった。これに関連して輸送体制が整備される一方、朝明両軍の軍糧として忠清・全羅両道の田税穀が活用された。

平壤奪回時までには模索された軍糧調達策としては、平安道内諸邑に備蓄された糧穀を義州・平壤間の直路沿道各邑に輸送すること、募粟・貿米によって軍糧を確保すること、忠清・全羅両道の田税穀を海路輸送すること、明糧を義州などに輸送すること、があげられる。

【第2期】この時期になると戦乱で民衆が逃散し、田地も荒廃したために、田税穀に依存する軍糧調達は困難となり、朝明両軍の駐屯地域が拡大した結果、軍糧輸送も容易ではなくなった。この時期には陸運より水運が活用されたが、それは①明糧を登萊州から金州を経て義州または平壤に輸送する際、②義州から広梁、江華、そしてそれ以南へ軍糧を輸送する際、さらに③忠清・全羅両道の田税穀を慶尚道に輸送する際、などに用いられた。

一方、明糧を遼陽から義州に輸送する場合には陸運によった。義州以南への明糧輸送も一部

⁵ ほかに金鎔坤「朝鮮前期 軍糧米의 確保와 運送」(『韓国史論』7、国史編纂委員会、서울、1980年)、同「朝鮮後期 軍糧米의 確保와 輸送—宣祖～顯宗年間을 중심으로—」(『韓国史論』9、国史編纂委員会、서울、1981年)、がある。

は陸運が活用されたが、全体的には陸運から水運へ転換する傾向にあった。ただし、輸送距離の拡大によって、輸送に従事した黄海道民は大きな苦痛を被った。

この時期の軍糧調達策としては、平壤奪回時まで用いられた方策が基本的にそのまま踏襲されたが、募粟から貢物作米へとその比重は移っていった。宣祖27年(1594)以降は、屯田と魚塩貿易も行われた。

【第3期】宣祖30年(1597)の日本軍再侵以後もそれ以前の軍糧の調達・輸送政策がそのまま踏襲された。ただし、この時期になると、来援明軍の増加にともない山東糧の移運が強調され、実施された。一方で、すでに朝鮮国内で調達できる軍糧は限界に達していた。

しかし、宣祖31年(1598)、朝明両軍が全羅・慶尚両道に割拠する日本軍を攻撃すべく、東路・中路・西路・海路の4路から総攻撃をかける作戦を立てるや、軍糧調達が大きな問題となった。朝鮮政府は、全羅・慶尚両道の田税穀を本道に留置して軍糧に充てるとともに、新たに漕船を準備して義州の明糧を漢城と全羅・慶尚両道に輸送した。

その方法は以前と同様で、まず広梁から江華に輸送し、その一部は漢城を経て忠州に輸送して慶尚道の軍糧に充て、残りを江華から恩津・全州・羅州等へ輸送して全羅道および水軍の軍糧とした。このほか、明は、不足する軍糧補充のために銀両と青藍布を本国から発送した。

この論文によって、文禄・慶長の役の全期間中における朝鮮政府の軍糧供給体制の概要はほぼ明らかになったといつてよい。この点が、この論文の最大の成果である。ただ、そうした論文の性格上、前述のように論点が多岐にわたり、ややまとまりを欠くきらいがある。と同時に、それにもかかわらず、戦争の全期間を網羅的に論じるには分量的に短く、それゆえ微視的な分析が全体として不十分との感を拭えない。

最後に〈ウ〉について紹介しよう。この論文の筆者である金康植は、文禄・慶長の役における軍糧供給体制を論じた既往の研究(上記の〈ア〉と〈イ〉)を、朝鮮官軍と来援明軍の軍糧調達策を単純に時期の前後によって区分して検討するのみで、軍糧調達によって生じる諸問題についてはさほど注目してこなかったと総括する。

具体的には、①研究の対象が朝鮮官軍と来援明軍の軍糧調達に限られ、日本軍の軍糧調達がほとんど注目されなかった、②この戦争期の軍糧調達問題がもたらした正確な実相と弊害について具体的に検討されなかった、③日本軍の朝鮮国内での軍糧調達がおよぼした影響についても関心が払われなかった、といった問題点が指摘できるという。〈ウ〉はこうした研究の現状を踏まえ、文禄・慶長の役における軍糧調達問題が戦乱中の義兵運動と以後の民衆反乱におよぼした影響について考察したものである。

金はず、朝鮮軍・日本軍・明軍それぞれの軍糧調達策を検討することから始める。このうち、朝鮮軍の軍糧調達については、それを官軍の軍糧調達と義兵の軍糧調達とに分け、前者についてはとくに朝鮮政府による納粟策の推移に注目して、納粟策が所期の目的とは異なり社会身分階層の変化という結果をもたらした点を強調する。一方、後者については、義兵の軍糧調達の具体的な方法をいくつかの実例を示しつつ紹介し、それらがいずれも中央権力や地方官の郡県統

治方式を通じてなされていたことを指摘する。

日本軍の軍糧調達については、日本軍は日本国内での戦争と同様に朝鮮でも軍糧の現地調達を意図したが、その過酷な収奪が民衆に抵抗を生じさせ、敗戦をみずから招く結果となったと述べる。また、明軍の軍糧調達については、明軍の軍糧は彼らが本国から持参するものと朝鮮国内で直接調達するものがあり、朝鮮側は各種の支援策を通じて明軍の軍糧調達と輸送につとめたが、糧餉の確保は困難をきわめたとする。明軍の軍糧調達はすべて朝鮮民衆の負担となり、それが義兵運動や反乱運動への民衆の積極的な参加につながったと結論づけている。

以上の検討に基づいて、次に金は軍糧調達策が朝鮮社会におよぼした影響について考察する。金が注目するのは戦争中に発生した朝鮮国内の反乱である。こうした反乱は、官僚による収奪や横暴、民衆の食糧難や生活苦とともに、軍糧の輸送と徴収の過酷さ、とくに日本軍と明軍の軍糧現地調達の過酷さを原因として発生した。

金は、具体的事例として宋儒真の乱(1593-94)と李夢鶴の乱(1596)を紹介し、この二つの反乱はいずれも身分制度の矛盾から脱しようとする下層民が戦乱に乗じて起こしたもので、反乱軍の構成員の大部分は被支配層に属する下層民だったとする。さらに、反乱の首謀者に義兵将が加担していた点にとくに注目し、これらの反乱は義兵の解体と深く関連して発生したものだたと論じる。

要するに、〈ウ〉の主題は文禄・慶長の役における朝鮮軍・日本軍・明軍の軍糧調達策そのものの解明ではなく、それが朝鮮社会におよぼした影響を明らかにすることである。たしかに、金がいのように〈ア〉〈イ〉においてはこのような問題設定はなされておらず、もっぱら軍糧調達・輸送政策およびその実態の解明に力点が置かれていた。また、分析の物足りなさは感じるものの、韓国人研究者としてはじめて日本軍の軍糧調達に注目した点も評価できる。そうした意味からすれば、〈ウ〉は重要な成果といえる。

だが、軍糧調達策の過酷さが朝鮮国内での民衆反乱発生 of 主要な要因となったとする結論自体は、すでに〈ア〉においても指摘されていたことであり、特段の目新しさは感じられない。〈ウ〉で興味深いのは、募粟による賞職や免賤の措置が朝鮮社会の身分秩序に大きな影響を与えたとする点(民衆反乱をその延長線上に位置づける論点)、および義兵の性格変化ないし解体と民衆反乱とを結びつけて理解しようとする点である。しかし、これらの点についても、実証を踏まえたうえで主張とはいいがたい面がある。その他、史料解釈上の疑問点もいくつか指摘できる。

以上、文禄・慶長の役における朝鮮側の軍糧供給問題を論じた3編の論文を紹介し、その内容を検討した。戦争期間中、朝鮮政府がどのように軍糧を調達・確保し、それをどのように朝鮮官軍や明軍に支給していたか、そのおおよその内容と時期的推移は、これまでの研究によってほぼ明らかにされたといつてよいだろう。しかし、それはあくまで概要ないしは見取り図にすぎない。朝鮮側の軍糧供給体制の特質やその社会的影響などをより明瞭な形で把握するためには、さらに微視的な接近が必要ではないかと考える。

足かけ7年間にわたる長期の戦争期間中、朝鮮政府は、そのときどきの戦況や政治状況とも密接にかかわりあいながら軍糧の調達や輸送の問題を議論し、それを実際の政策に反映させてい

ったはずである。与えられた選択肢のなかで朝鮮政府はどのような政治的・軍事的判断を行い、戦争を遂行していったのだろうか。あるいは、軍糧そのもののだけではなく、その調達や輸送のための労働力はどのように確保され、軍糧調達・輸送作業の指揮・監督体系はどのようなものだったのだろうか。こうした点を解明するためにも、より微視的な視点からの実証研究が必要だろう。いわば、時間的な面での微視的研究である。

それと並行して、空間的な面での微視的研究も深められねばならないだろう。既往の研究は、主として中央政府レベルで軍糧供給の問題を論じており、〈ウ〉の論文が義兵部隊の軍糧調達について簡単に紹介しているのを除けば、各地域や部隊ごとに、それぞれどのような軍糧供給体制がとられていたかについてはほとんど明らかになっていないように思われる。前線部隊の指揮官や義兵将が、自身の部隊のためにどのように軍糧を確保していたのか、個別の事例研究を積み重ねていく必要を痛感する。

さて、以下では開戦初期における朝鮮政府の軍糧調達・輸送政策について検討する。これはいま述べた課題のうちの前者、すなわち時間的な面での微視的研究を実践しようとするものである。もとより、準備期間の関係で完全なものではないが、態勢の整わないなか、また北上を続ける日本軍の脅威が切迫するなかで、朝鮮政府はどのように軍糧問題を処理していったのか、その過程をみていくことにしたい。

III. 開戦初期における軍糧穀の調達と輸送

1. 宣祖25年(1592)4月～5月(開戦から臨津江の戦闘敗北後まで)

宣祖25年(1592)4月13日、日本軍の第一陣が朝鮮半島南端の釜山浦に上陸し、文禄・慶長の役が始まった⁶。日本軍は破竹の勢いで進撃を続け、しだいに漢城へと迫った。これに対し、朝鮮政府は平壤へ避難して明に救援を仰ぐことを決定し⁷、同30日、宣祖は高官たちとともに漢城を脱出した⁸。そして開城を経て⁹、5月6日には黄州にまで達した¹⁰。文禄の役開戦後、宣祖と臣下との間で軍糧問題が議論されたのは、管見の限りこのときが最初である¹¹。『宣祖実録』には次のように記されている。

A₁

上引見黄海監司趙仁得、(中略)上曰、平壤無絶粮之憂乎、仁得曰、此道亦有軍粮、已為運送矣、(後略)

⁶ 『宣祖実録』巻26、25年4月壬寅(13日)条。

⁷ 『宣祖修正実録』巻26、25年4月「是月二十九日夕」条。

⁸ 『宣祖実録』巻26、25年4月戊午(29日)・己未(30日)条。

⁹ 『宣祖実録』巻26、25年5月辛酉(2日)・壬戌(3日)条。

¹⁰ 『宣祖実録』巻26、25年5月乙丑(6日)条。

¹¹ 『宣祖実録』巻26、25年5月甲申(1日)条には「豊徳郡守李随亨、謁於道左、稍備御膳、百官亦得食、下至軍粮・馬料、亦皆措備、別献米五石、上即分賜従行衛卒、夕次開城府」とあって「軍粮」の文字がみえるが、これは、宣祖一行が避難の途上、豊徳郡に達した際に同郡郡守の李随亨が宣祖一行に供応した事実を伝えるものであり、朝鮮政府の軍糧供給問題とは直接関係しない。

(『宣祖実録』卷26、25年5月乙丑〔6日〕条)

A₂

引見崔興源・尹斗寿等、(中略)上曰、士兵当帶去、但何以為糧、斗寿曰、自三県、給二十日糧矣、(後略)

(『宣祖実録』卷26、25年5月乙丑〔6日〕条)

まず史料 A1をみると、避難先である平壤の糧穀備蓄状況に懸念を示した宣祖に対して黄海道觀察使趙仁得は、すでに「此道」すなわち黄海道の軍糧を平壤へ輸送したと述べている。むろん、この黄海道穀の平壤移送は趙仁得の独断による措置と考えられ、このとき朝臣たちの間で広く軍糧問題が議論されたわけではない。

同じ日、宣祖は「本道士兵」(黄海道在地の兵をさすか)の指揮官の人選をめぐる領議政崔興源・左議政尹斗寿¹²らと協議した¹³。その際に尹斗寿との間で交わされたやりとりを記したのが次の史料 A2である。宣祖が「本道士兵」の携行する軍糧の手配について問うたところ、尹斗寿は「三県」の糧穀中から20日分の軍糧を支給すると答えている。

もっとも、ここでいう「三県」が具体的にどの邑を指しているのかは不明である¹⁴。また、このとき組織された「本道士兵」は、日本軍の臨津江渡河を阻止するために同地へ派遣されたものとみられるが¹⁵、臨津江に結集した朝鮮官軍の軍糧として5月20日の時点では金谷倉の税穀活用が議論されており(後掲史料 C)、実際に「士兵」に対して「三県」穀から軍糧が支給されたのかどうかも疑問

¹² 崔興源と尹斗寿は宣祖25年(1592)5月2日にそれぞれ領議政・左議政に任じられた。『宣祖実録』卷26、25年5月辛酉(2日)条。

¹³ 『宣祖実録』卷26、25年5月乙丑(6日)条。いささか長文の引用となるが、史料 A₂として本文中に引用した部分も含めて当該条の記事全文を示せば次のとおりである。

引見崔興源・尹斗寿等、上曰、卿等見兪泓上疏乎、開城離發、豈予之所爲乎、興源曰、賊兵入城三日、而其後未聞攻戰之言、都元帥所報、亦不明白、羣議則皆言、本道士兵精銳、欲定將、称以都巡察之号遣之矣、上曰、当送何人、興源曰、無人、斗寿曰、李潤德、上曰、申砮不可為乎、將不良、則兵散矣、全羅之兵、何不入援、斗寿曰、沈岱既以徵兵下去、但道路不通云、李薦・趙誼・金穀一、皆驍健、大將則欲以韓応寅為之、応寅年少、勝於都元帥、而但都元帥、方率大軍、易將為難、上曰、不可以孤軍深入、不得已發全羅兵乃可、斗寿曰、下書招之為當、上曰、申砮定死乎、興源曰、或言不死云、斗寿曰、李賛當罪之、兵使則以金誠一或朴晉為之可也、上曰、右兵使、誰可為乎、斗寿曰、曹大坤可也、上曰、士兵当帶去、但何以為糧、斗寿曰、自三県、給二十日糧矣、韓応寅、則称都巡察使、趙誼等則陞堂上遣之、上曰、何難、斗寿曰、昔者、光廟来此、多取士、今亦当取士、忠元曰、軍卒等、皆赴戰、赴挙者必少矣、上曰、預為通諭、使興起其心也、上以李尚毅持来書狀、示于大臣曰、此報又如此、此亦不能守矣、權徵又以為不能守云、奈何、忠元曰、使蔵兵臨津等处、令賊不得渡、則幸矣、上曰、申砮在臨津乎、斗寿曰、申砮則有前進之計、金汝暉亦將往云、上曰、大概今日所言主意、遣韓応寅事乎、興源曰、本道士兵、巡察使当領去、故如是啓之矣、上曰、依此為之、且江辺士兵幾何、斗寿曰、八百餘名、上曰、軍器火砲、則何出、斗寿曰、持来矣、上曰、此处扈衛、則何以為之、斗寿曰、本道兵二千餘人矣、

この記事の前半部分に、「本道士兵」の指揮する「都巡察」使を任命して派遣することが議論され、その適任者として韓応寅の名が挙がっている。そして、この議論を踏まえて韓応寅は都巡御察使に任命され、同じくこのとき防禦使に任命された李薦とともに臨津江へ赴いて同地に滞在する都元帥金命元・守禦使申砮らを補佐することを命じられた。朴東亮『寄斎史草』下、壬辰日録1、壬辰5月初8日条。なお、『寄斎史草』の当該条では「諸道都巡御史」と記すが、『宣祖実録』では上記記事も含め「都巡察使」で一貫しており、こちらが正しいと判断される。

¹⁴ 後述するように、宣祖一行が平壤に行在所を設けたのちには「三県」の糧穀を軍糧として活用することに関する議論がしばしばなされた。この場合の「三県」は平壤付近の龍岡・江西・咸從を指す。しかし、史料 A₂にみえる「三県」がこれらの邑をさしているのかどうかは決め手がなく、現在のところ不明とせざるをえない。

¹⁵ 註13に引用した『宣祖実録』卷26、25年5月乙丑(6日)条の後半部分を参照。

である。いずれにせよ、宣祖と尹斗寿とのやりとりはごく簡単なものであり、これを朝鮮官軍の軍糧問題に関する本格的な議論とみなすことはできない。

宣祖一行が当面の避難先である平壤に入ったのは翌5月7日だった¹⁶。そしてこれ以後、朝鮮政府内では朝鮮官軍への軍糧供給策が本格的に検討されるようになる。まず、次の記録をみてみよう。

B

備辺司啓曰、(中略) 牙山倉漕運、亦令黄海監司、指送于西海海路、上從之、(『宣祖実録』卷26、25年5月壬申〔13日〕条)

平壤に行在を定めた数日後の5月13日、備辺司は黄海道觀察使(趙仁得)に命じて牙山倉の漕運船団を西海海路へ進めさせることを宣祖に請い、裁可を得た。

牙山倉は忠清道牙山の牙山湾沿岸に設置されていた漕倉で、正式には貢税串倉という。毎年道内沿海部40邑の田税穀がこの漕倉で収税され、¹⁷海路、漢城へ航送されることになっていた¹⁸。5月というのは漕運の時期としてはやや遅いが¹⁹、このとき牙山倉からの漕運船団は朝鮮半島の西海岸沖を航海中だったものと推測される。

漕運船団の西海海路への指送とは、牙山倉の田税穀を行在所のあった平壤に輸送させることを意味する。後述するように、この漕運船団には田税米1,200石が積み込まれていた(後掲史料P)。これを平壤へ運ぶことで、行在所での諸経費の財源を確保するとともに軍糧としても活用しようとしたのだろう。平壤には趙仁得によってすでに黄海道穀が移送されていたはずだが(前掲史料A₁)、それだけでは不十分だったものと推測される。しかしながら、後述するように宣祖の平壤滞在中にこの牙山倉の田税穀は平壤へは届かなかった。牙山倉の田税穀は、やがて別の目的のために用いられることになる(後掲史料 PQ₁Q₂)。

次いで5月20日、宣祖は大臣と備辺司・兵曹の堂上官らを引見し、北上を続ける日本軍迎撃のための軍糧調達について議論した。

C

上引見大臣・備辺司・兵曹堂上、承旨盧稷・注書朴鼎賢・仮注書韓禹臣・翰林金善餘・金義元同入侍、上曰、如有所欲言、皆言之、尹斗寿曰、韓応寅、十日出去、精兵連続而往、今聞、十八日渡江云、今日間當挙事、東辺捕倭事、元帥已知、士氣必増、可望成功、上曰、成功与否、未可預料、更無措置事乎、軍糧何以為之、

¹⁶ 『宣祖実録』卷26、25年5月丙寅(7日)条。

¹⁷ 『新增東国輿地勝覧』卷20、忠清道牙山県倉庫貢税串倉条。

¹⁸ 六反田豊「李朝初期の田税輸送体制—各道単位にみたその整備・変遷過程—」(『朝鮮学報』第123輯、朝鮮学会、天理、1987年) 100-121頁。

¹⁹ 『各司受教』戸曹受教には「癸亥」すなわち明宗18年(1563)2月17日の戸曹啓目が収録されているが、それには「今後各道田税乙、依大典開倉捧上、法聖・群山・牙山等倉田税乙、翌年三月内畢漕運不得為白去等、捧上差使員乙、勿揀赦前罷出為白乎矣」(傍線部は吏誼)とある。

此非二三日所決、曠日持久、則軍糧当汲汲措置、仍問臨津兵幾何、斗寿曰、万餘、(中略)上曰、金谷倉在何処、崔興源曰、在江陰、常留田税、時存二千石矣、興源又曰、以日計之、昨日・今日必為挙事、自此蕩平則幸矣、(中略)沈忠謙曰、賊窮蹙迫死、則棄劍乞降云、上曰、此賊之性不然、乞降之言、未可信也、軍糧措置、若有未尽、更為議啓、今日之事、無有大於此者、臨津之軍、已為渡江乎、誠中曰、狀啓陪持人言、已渡云、上曰、淺灘皆守之乎、昨聞澄波渡、無一人守之、甚虛疎矣、李德馨曰、渡大灘後、渡澄波渡、想其処軍皆聚于臨津矣、上曰、大灘亦舟渡乎、德馨曰、霖雨如此、不得徒涉、上曰、軍糧外、他無挙行事乎、金谷倉米、可支二十日云、二十日安可期其畢事乎、盧稷曰、軍事遲速、未可預料、上曰、次次輸轉、恐不及用云、此外他無可措置乎、(後略)(『宣祖實録』卷26、25年5月己卯[20日]条)

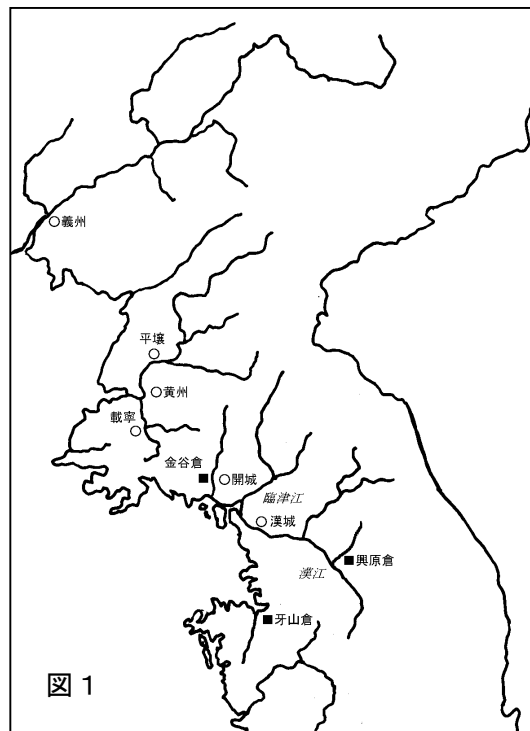


図 1

史料 C の尹斗寿の発言中に「韓応寅、十日出去」とあるが、韓応寅は5月6日に諸道都巡察使に任じられ、同じくそのとき防禦使に任じられた李薦とともに都元帥金命元の補佐を命じられているので²⁰、「十日出去」とは、その任務のために彼が前線の金命元のもとへ出発したことをさしている。朝鮮政府は、臨津江の手前で日本軍の進撃を阻止すべく反撃準備を進めていた。このときの朝議では、そうした朝鮮官軍の反撃に必要な軍糧として金谷倉所蔵の田税穀が注目されたわけである。

金谷倉は史料 C では黄海道江陰所在とあるが、実際にはその隣邑である白川の礼成江岸に置かれた漕倉で、附近12邑の田税穀を収納していた²¹。それらの田税穀は、ここから礼成江・漢江の河川水路によって漢城まで送られることになっていた²²。史料 C によれば、当時この漕倉には2,000石の田税穀が存在した。時期的にはすでに漕運の期間を過ぎているので、これは漕倉に残されていた税穀とみるべきかもしれないが、にわかに断定できない。

ともあれ、この金谷倉の2,000石をもって臨津江岸に集結した朝鮮軍兵士1万人の20日分の軍糧が供給できるとある。しかし、宣祖はそれでも軍糧確保に不安を拭えなかったようで、朝鮮政府にとって軍糧問題は開戦当初から大きな懸案となっていたことが知られる。

²⁰ 註13参照。

²¹ 『新增東国輿地勝覧』卷43、黄海道白川縣倉庫金谷浦倉条。ちなみに、江陰には助邑浦倉が置かれており、附近12邑の田税穀を収納していた(同書卷43、黄海道江陰縣倉庫助邑浦倉条)。このときの朝議では、助邑浦倉の田税穀にはまったく言及がないが、こちらにはすでに在庫の穀物がなかったのだろうか。

²² 六反田豊、前掲論文、122-124頁。

ところで、平壤の行在所で如上の朝議がなされる2日前の18日、臨津江ではすでに日朝両軍の間で戦闘が行われ、朝鮮側は大敗を喫していた²³。恐らくその報告を受けてのことだろうが、さきの朝議から3日後の5月23日、平壤の行在所では、あらためて兵力の立て直しと軍糧調達の方策が議論された。

D

上引見大臣崔興源・尹斗寿・右賛成崔滉・礼曹判書尹根寿・戸曹判書韓準・兵曹判書金応南・大司憲李恒福・同知李誠中・副提学沈忠謙・大司諫鄭崐寿・同知李德馨・兵曹参判李挺立・参議黃暹・参知鄭士偉・承旨柳根・注書朴鼎賢・仮注書韓禹臣・翰林金善餘・金義元等、上曰、賊事何如、崔興源曰、臨津敗後、軍卒散亡、士兵五百、初不与戦、申砧所率、亦多聚会、方招集餘軍、更為挙事云、南兵使又当来到、先送三千五百、最是精卒、臨津敗軍、雖未及齊到、豈尽死乎、劉克良・金汝律、則不知去处云、斗寿曰、觀其形勢、兵連不解、運粮甚難、聞載寧屯田所儲二万石云、可以用、興源曰、金谷倉穀、方取用云、牙山倉穀、亦欲取来、而道路不通、今始定軍輸来、(中略)興源曰、李渾之兵、亦当来会、今日最可憂者軍粮、而開城米四百餘石、籍田穀千餘石、此皆可用、金谷倉、亦当繼用、牙山倉、今欲輸運、興原倉亦有二千餘石、大概倉穀、雖存而輸運為難、三江人、多聚船、昨令尹湛往將之矣、上曰、賊奪此船、則奈何、興源曰、避賊之人、載其妻子、必尽力防之、(後略) (『宣祖実録』卷26、25年5月壬午〔23日〕条)

史料 D によれば、朝議の席上、尹斗寿は黃海道載寧所在の屯田の収穫20,000石が利用可能であることを述べ、崔興源は前出の金谷倉と牙山倉の田税穀のほか、開城の米400餘石と籍田穀1,000餘石、さらに江原道原州所在の漕倉である興原倉²⁴の田税穀2,000餘石が利用可能であることを明言している。しかしその一方で、両者ともにこれら官穀の輸送面での困難さについても指摘している。崔興源はその対策として「三江」(漢江・龍山江・西江²⁵)の私船を用いて輸送を行い、尹湛なる人物を派遣してそれを監督させたと述べている。

ところで、ここで議論されている官穀の輸送が行在所のあった平壤への輸送をさすのか、あるいは朝鮮官軍の前線への輸送をさすのかは、史料 D のみでは判然としない。そこで、柳成龍の『懲毖録』にみえる次のような記述が参考となる。

E

始車駕至平壤、廷議皆以粮餉為憂、尽取列邑田税、輸到平壤、及城陷、并本倉穀十餘万石、皆為賊所有、(『懲毖録』卷1)

²³ 『宣祖修正実録』卷26、25年5月条。

²⁴ 『新增東国輿地勝覽』卷46、江原道原州牧倉庫興原倉条によると、この漕倉は漢江の支流である蟾江岸に位置し、附近5邑の田税穀を収納することになっていた。ここから運び出された田税穀は蟾江・漢江の河川水路によって漢城まで輸送されることになっていた。六反田豊、前掲論文、125-134頁。

²⁵ 高東煥によれば、「三江」とは漢江・龍山江・西江の総称で、南山南方一帯から鷺梁津までを漢江、その西から麻浦までを龍山江、麻浦の西から楊花津までを西江といった。高東煥『朝鮮後期서울商業発達史研究』(知識産業社、서울、1998年)217-218頁。

この記述から判断すると、各地の田税穀はすべて平壤に輸送されたようである。その額が平壤の官穀も含めて十餘万石にものぼったというから、史料Dに確認できる以外にも、かなり多数の邑の田税穀が平壤に集められていたことが知られよう。

このように朝鮮政府では、開戦後約1か月を経て平壤に避難したのち、ようやく軍糧の調達と輸送のための対策が本格的に検討され始めた。まず、行在所での諸経費財源と軍糧の確保の措置が講じられ、たまたま漕運途上にあった忠清道牙山倉の田税穀をこれに充当することが下命された。しかし、この田税穀が平壤に届かないうちに、宣祖一行はさらに北への避難を餘儀なくされた。

次いで、北上する日本軍への反撃・迎撃態勢を整えるために、黄海道・江原道の漕倉穀や屯田の収穫物などが軍糧として活用されることになった。軍糧の調達先や調達額はしだいに拡大・増加する傾向にあり、朝鮮政府による軍糧調達活動は着実に進んだようである。その具体的な活動内容は『宣祖実録』の記事だけでは明らかにしえないが、少なくとも、当面必要な軍糧の確保には目処が立ったとみてよい。しかしそれらの輸送にあたっては、戦乱で道路が不通となったこともあって多大な困難をともない、「三江」私船の活用などが試みられた。ともあれ、最終的には十餘万石の軍糧が平壤に集積されたのである。

なお、この時期の軍糧問題をめぐる出来事としては、このほか、平壤避難後の5月23日、平安道价川の富民が4,000石の穀物を官に納付し、褒賞として堂上官の実職を授与された事実²⁶が注目される。地方の富民に穀物の供出を求め、代償として官職を授与したり免賤等の恩典を施したりするいわゆる募粟は、のちに活発に行われるようになるが、价川県の事例はその契機の一つとなったものと思われる。

また、5月25日には、鴨緑江の沿江地帯で徴兵した「江辺土兵」を慰撫するために彼らに酒肉綿布が支給されたのを受けて、平安道内の官軍兵士に対しても道内の田税穀や官倉所在の米・太が支給された事実を確認できる²⁷。この時点では、平安道内の備蓄穀にはまだかなりの餘裕があったのだろう。

2. 宣祖25年(1592)6月～7月(明軍の来援から明将祖承訓の平壤奪回失敗まで)

1) 来援明軍への対応

臨津江の戦いに勝利した日本軍は5月27日から28日かけて臨津江を渡り、29日には開城を陥落させた²⁸。6月8日には平壤を臨む大同江岸にまで迫り²⁹、翌9日、朝鮮側に講和を求めた³⁰。し

²⁶ 『宣祖実録』卷26、25年5月壬午(23日)条には「价川富民李春蘭、前後納穀四千石、備辺司、請除堂上実職、以簞動道内富民、上従之」とある。

²⁷ 『宣祖実録』卷26、25年5月甲申(25日)条には「本道都巡察使李元翼馳報云、各官徴兵、聚待已久、令各其官繼餉、而道路遼遠、饑餓者多、備辺司以為、江辺土兵、則酒肉綿布、以示優恤之意、独於内地之兵、有同越視、請令戸曹俵給田税或倉儲米太、上従之」とある。

²⁸ 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』(吉川弘文館、東京、1995年)63-64頁。

²⁹ 『宣祖実録』卷27、25年6月丙申(8日)条。

³⁰ 『宣祖実録』卷27、25年6月丁酉(9日)条。

かし、大同江岸で同日開かれた日朝間の講和会談は決裂し³¹、日本軍は10日に大同江東岸に布陣した³²。そこで翌11日、宣祖一行は平壤からさらに北方の寧辺に逃れ、日本軍の動向によってはさらに明と国境を接した義州まで避難することとした³³。一方、日本軍は15日、無人となった平壤城に入城したが³⁴、前掲史料 E によれば、朝鮮政府が平安道内各邑から平壤に集めた軍糧は、そっくりそのまま日本軍のものとなってしまった。

さて、平壤陥落の直前である6月13日、明の遼東鎮撫が派遣した林世禄が平安道安州に到着し、朝鮮救援の意向を朝鮮側に伝えた³⁵。さらにその翌日には、義州にいた海平府院君尹根寿に対して明軍から恩賜犒軍銀2万両がもたらされ、尹根寿は、寧辺に留まっていた宣祖のもとに明軍の鴨緑江渡江を報告した³⁶。宣祖は尹斗寿を通じてこのことを朝鮮の諸軍に伝達し、清川江で日本軍の北上をくい止め、明軍の来援を待つよう命じた³⁷。

こうして6月15日から19日にかけて、参将戴朝弁・遊撃史儒・参将郭夢徴・遊撃王守官・副総兵祖承訓ら、遼東地方の明軍部隊が相次いで鴨緑江を渡り、朝鮮に入ってきた³⁸。この間、18日には平安道宣川の林畔館に到着した史儒・郭夢徴らと朝鮮側との間で軍事指揮権をめぐる対立が生じ、史儒・郭夢徴らがいったん義州へ引き揚げるという事態も発生したが³⁹、24日、郭夢徴は義州の龍湾館にて宣祖の行札を受け、皇賜銀2万両を朝鮮にもたらして明軍来援を伝えた⁴⁰。

明軍の朝鮮救援が決定したことで、朝鮮側の軍糧供給問題は新たな局面を迎えることになった。明軍へ供給するための軍糧調達が大きな懸案となり、朝鮮政府はそのための対策に苦慮しなければならなくなったのである。朝鮮政府はすでに6月1日の段階で明軍への接待・供応のために沈喜寿を接待使に任命して義州へ派遣し、かつ洪宗禄・洪世恭・沈友勝の3人を三路調度使となして明軍へ供給する軍糧を管轄させる措置を講じていたが⁴¹、明軍の軍糧供給問題に関する政府内での具体的な議論は、明軍の鴨緑江渡江が始まった6月15日から確認できる。

F₁

豊原府院君柳成龍、自平壤入朝、(中略)成龍曰、若天兵到定州、則当有犒軍之事、安州已出米二十餘石、使之釀酒、且備牛豕以待矣、五百石、乃五千名十五日粮、各州各府、各給三日粮則可、(中略)成龍曰、軍粮不得已預備可也、平壤則有四万餘石、若及到平壤、則無患矣、(後略) (『宣祖実録』卷27、25年6月癸卯〔15日〕条)

³¹ 『宣祖実録』卷27、25年6月丁酉(9日)条。

³² 北島万次、前掲書、66頁。

³³ 『宣祖実録』卷27、25年6月己亥(11日)条。

³⁴ 『宣祖実録』卷27、25年6月癸卯(15日)条。

³⁵ 『宣祖実録』卷27、25年6月壬寅(14日)条。『宣祖修正実録』卷26、25年6月条。

³⁶ 『宣祖実録』卷27、25年6月壬寅(14日)条。

³⁷ 『宣祖実録』卷27、25年6月壬寅(14日)条。

³⁸ 『宣祖実録』卷27、25年6月甲辰(16日)・乙巳(17日)・丙午(18日)・丁未(19日)条。

³⁹ 『宣祖実録』卷27、25年6月丙午(18日)条。『宣祖修正実録』卷26、25年6月条。

⁴⁰ 『宣祖実録』卷27、25年6月壬子(24日)条。

⁴¹ 『寄斎史草』下、壬辰日録2、壬辰6月初1日己丑条には「尹斗寿、既已請兵於天朝、凡接濟之策、不可不先為講究、遂以沈喜寿為接待使、先往義州、又以洪宗録・洪世恭・沈友勝為三路調度使、分管粮餉」とあり、『宣祖修正実録』卷26、25年6月条にも「分遣調度使于諸路、措置粮餉」とある。

F₂

備辺司啓曰、一天兵之到平壤、不可不別様犒勞、如直路疲弊、州郡固難取辨、平壤及附近三県等处、酒饌諸需、合力豊儲、別為犒勞事、請馳諭於柳成龍及本道觀察使処、上允之、(『宣祖実録』卷27、25年6月癸卯〔15日〕条)

F₃

伝曰、天兵今雖一二千出来、不無隨後加来之事、一路供饋釜鼎菟粮等物、以万兵之供措置以待、(『宣祖実録』卷27、25年6月癸卯〔15日〕条)

まず史料 F₁は、平安道博川に滞在中の宣祖のもとに平壤から遅れて駆けつけた豊原府院君柳成龍が、宣祖とともに来援明軍への接待と彼らに支給する軍糧調達について議論した内容を伝えている。それによれば、柳成龍は、明軍の平安道定州到着後、安州の米20餘石で醸した酒と牛・豚で接待すること、そして、明軍に支給する軍糧としては5,000人15日分に相当する500石が必要だが、それは安州近辺の各邑が3日分ずつを供出すればよいことを述べている。また、平壤には4万餘石の糧穀があり、明軍が平壤に達したら(平壤を奪回したら)、それが利用できるので支障はないとしている。

次の史料 F₂は、この問題に対する備辺司の上啓である。明軍の平壤到着後における犒勞費用を平壤とその「附近三県等处」(龍岡・江西・咸從)の負担で実施することとし、この点を柳成龍と平安道觀察使に馳諭することを請い、宣祖の裁可を得た。最後の史料 F₃は、明軍へ供給する軍糧その他の物資類について、追加部隊の来援を予想して餘裕をもって準備すべきことを下命した宣祖の伝旨である。

以上の3史料によって、明軍来援にともない朝鮮政府が迅速に明軍への軍糧調達策を議論し、実施に移していたことがわかる。しかし、その内容は、宣祖の伝旨を除けばいたって楽観的なものだった。

たとえば、柳成龍は兵士5,000人15日分として500石の軍糧を想定しているが、これは1人1日わずか1升を支給する計算であり、5,000人の兵力を支えるには少額というほかない⁴²。5,000人という数字自体が来援明軍の数をかなり多く見積もったものであり、それゆえにこれでもよしとされたのだろうか。それにしてもかなり大雑把な計算といわざるをえない。15日という期間についても、文脈から判断する限り、その程度の日数があれば平壤奪回は可能だと柳成龍は考えていたようだが、設定の基準が不明確である。一方、備辺司の上啓は軍糧というよりは明軍兵士への慰勞費用に関するものであり、やはり平壤奪回を前提としてその後の対応を述べたものである。

これらに対して、宣祖の伝旨は、明軍第一陣到着ののちに追加部隊が派遣されることも想定して周到な準備を下命するものであり、宣祖自身は柳成龍や備辺司の意見に必ずしも満足してい

⁴² 前掲の史料 C には2,000石で1万人の兵士の20日分を賄えとあり、この場合は1人1日1升5合を支給する計算である。それがここでは5合分だけ減額されたことになる。朝鮮の1升は日本の1升の約1/3、すなわち約600ccである。

なかったことが看取される。

15日深夜に博川を發った宣祖は、翌16日早朝に嘉山へ入り⁴³、その地で從臣たちを引見して再度この問題を議論した。その席上、平安道各地の糧穀備蓄状況が知らされるにともない、前日の議論がきわめて樂觀的で甘い見通しであることが明白となった。

G

是朝、上在嘉山、上引見從臣、柳成龍曰、清川江辺、一為決戰、則庶可矣、沈信謙言、本郡軍糧有五六百石、而定州則全無云、上曰、到今日、始言定州無糧何耶、成龍曰、義州則遣洪世恭矣、猶不能措置云矣、上曰、二千軍往還之糧、亦不得措備乎、鄭澈等曰、博川・寧辺、則軍糧稍有所儲云矣、上曰、不言可也、群臣無有為之志、故至於如此也、成龍及澈曰、使諸將等會於此地為當、(後略)『宣祖實錄』卷27、25年6月甲辰〔16日〕条)

史料 G によれば、朝議の席上、柳成龍は、清川江岸で一度決戦すればそれですむだろうと述べつつ、嘉山郡守沈信謙⁴⁴の言を引いて、その際明軍の拠点となる嘉山と定州の軍糧備蓄状況について、嘉山には5～600石の軍糧が確保されているが⁴⁵、定州には備蓄穀がまったくない⁴⁶ことを明らかにした。ほかに博川と寧辺にも若干の備蓄穀があることが鄭澈等から報告されているが、宣祖はいまになってこうした状況にあることに驚き、「群臣無有為之志、故至於如此也」と怒りを露わにしている。

こうして、実際には2,000人の兵力さえ支えるのが厳しい状況であることが判明するや、宣祖は17日、李礪を義州に派遣して兵馬糧餉等を事前に措置することを命じた⁴⁷。しかし、朝鮮側の厳しい状況とは裏腹に、ときを同じくして明側からもこの問題に対して強い圧力がかかってきた。たとえば同日、請援使李德馨からの馳啓が届き、明の史遊撃・戴参将らが兵士1,000人を率いて鴨緑江を渡江したことを報じるとともに、明側でも平壤進撃時の朝鮮側による軍糧供給を憂慮していることが伝えられた⁴⁸。さらに翌18日には、副総兵祖承訓の鴨緑江渡江に際して、糧草を準備して

⁴³ 『宣祖實錄』卷27、25年6月癸卯(15日)条。

⁴⁴ 『懲毖錄』卷1には、註45の引用史料にみえるように嘉山郡守として出てくるが詳細は不明である。

⁴⁵ 次に引く『懲毖錄』卷1の記述は史料 G と同時期のものだが、これによれば沈信謙は柳成龍に、嘉山には白米1,000石の官保有穀があると語っている。軍糧のみならず、その他の官穀も含めての数値だろうか。

自駕出平壤、人心崩潰、所乱過乱民、輒入倉庫、搶掠穀物、順安・肅川・安州・寧辺・博川、以次皆敗、是日、駕發嘉山、郡守沈信謙、謂余曰、此郡糧穀頗優、官庠亦有白米一千石、欲以此餉天兵、不幸事至於此、公若少留鎮定、則邑人不敢動、不然乱作、小人亦不敢留、此將向海辺躲避矣、

⁴⁶ 本文中の後掲史料 J₁には「甚少」とあり、同じく後掲史料 K₂には「時存只二百餘石」とある。いずれにしてもごくわずかの備蓄穀しかなかったことだけはまちがいない。

⁴⁷ 『宣祖實錄』卷27、25年6月乙巳(17日)条には「且李礪即刻送于義州、兵馬糧餉・一応雜物、預先措置、使不煩擾」とある。

⁴⁸ 『宣祖實錄』卷27、25年6月乙巳(17日)条には次のように記す。

請援使李德馨馳啓曰、臣受命之後、緣一路、夫馬幾尽逃散、艱難得行、今日巳時、始到義州、適広寧遊撃史儒・督戰参将戴朝弁、領兵一千渡江、臣令訳官洪秀彦告曰、賊到城下、已七八日、令若徐行、則將到十餘日之外、不但孤城甚危、且賊之行兵、例以戌日来、二十日又是戌日、必須及二十日前可得赴救、答曰、二十日、當及到彼處、天將号令嚴明、雖一草一粒、不許士卒濫取、侵擾我軍、万無所虞、而一路繼餉、似甚可慮、

待機すべきことが朝鮮側に要請された⁴⁹。

さて、16日に嘉山から定州へ移動し⁵⁰、18日に定州から宣川に移った⁵¹宣祖一行は、さらに北方へと避難を続け、龍川を経て⁵²、22日、ついに義州に入った⁵³。宣祖は義州において遼東内附（鴨緑江を越えて遼東地方へ避難すること）の是非を従臣らに諮ったが、従臣らはこぞってこれに反対した⁵⁴。そうしたなかで、25日には尹斗寿によって昌城進駐が提案された。

H

左議政尹斗寿啓曰、臣等前言不可過江、則自上問以他可往處矣、義州乃一隅之地、龜城・朔州、又有一路、賊鋒若由此处、則恐為所困、如昌城之地、進駐為当、答曰、然則幾時去乎、由何處去、回啓曰、不得已哨探、然後去之可也、大駕既去之後、恐人民又為渙散、去時須言于天將、然後去之為当、上曰、予雖往某處、礼曹判書^{尹根}・豊原府院君^{柳成龍}、不離於此、賊若西向、告急於天將、成龍曰、天將若来、則本州倉穀、可支万軍一月糧、臣之所急者、史遊擊・祖摠兵進兵時、我国当有定將嚮導之事、其將官及軍士措置事、請令備辺司議處、上從之、(『宣祖実録』卷27、25年6月癸丑〔25日〕条)

結局、昌城進駐は実現しなかったが、この問題をめぐる議論を記した上掲の史料Hには、当時の義州における備蓄穀についての柳成龍の発言があり注目される。柳成龍によれば、このとき義州には1万人の兵士を1か月支えられる糧穀が存在した。兵士1人1日の軍糧を1升とすれば2万石、1升5合とすれば3万石の備蓄があったことになる。

しかし、そうだとすると、明軍に供給する軍糧調達は朝鮮政府にとってやはり重い負担であることにちがいがなかった。次の史料もそのことを示すものである。

I

上将見夏時・黄応陽・徐一貫等三人、出龍湾館、先引見尹根寿・都承旨朴崇元・奉教奇自献、(中略)上曰、予意粮餉亦似当並請、不然則難支也、根寿曰、自天津衛輸運則易矣、(中略)上乃許接見三人、自外揖讓而入、夏時為先、応陽次之、一貫又次之、行礼訖、(中略)上曰、小邦本来残薄兵禍之餘、粮餉不繼、天朝欲救小邦、則粮餉亦欲仰請、而惶恐不敢、応陽曰、兵馬雖到無粮則奈何、粮餉亦可船運、一貫曰、自有朝廷处分、柳根曰、賊兵若自水路直犯於遼境、則勢難防禦、舟師不可不請、応陽曰、遼東無舟師、当入去措處、行茶礼、上曰、小邦再活之命、全繫於三大人、請拝以別、三人曰、決不可乃各作揖、上曰、願天朝速来救済、且三大人、於石爺處、以所見言之速為来救、(『宣祖実録』卷28、25年7月己未〔2日〕条)

⁴⁹ 『宣祖実録』卷27、25年6月丙午(18日)条には「礼曹判書尹根寿・弘文館副应教沈喜寿馳啓曰、臣等十七日曉渡江、往見祖摠兵、告倭賊已渡大同江、摠兵曰、今明日軍馬当渡江、只備粮草以待云」とある。

⁵⁰ 『宣祖実録』卷27、25年6月甲辰(16日)条。

⁵¹ 『宣祖実録』卷27、25年6月丙午(18日)条。

⁵² 『宣祖実録』卷27、25年6月丁未(19日)条。

⁵³ 『宣祖実録』卷27、25年6月庚戌(22日)条。

⁵⁴ 『宣祖実録』卷27、25年6月辛亥(23日)・壬子(24日)条。

すなわち、7月2日、明の兵部尚書星石によって派遣された遊撃夏時・参将黄応陽・指揮徐一貫等が義州を訪れた際⁵⁵、宣祖は彼らを接見し、明に対して兵力のみならず軍糧の提供をも求めた。これに対して応陽は、朝鮮側の窮状を理解し、糧穀を遼東から朝鮮へ船運する案を出している。

しかし、明軍の平壤奪回失敗までの間に朝鮮側が再度このような要求を明側に申し入れた形跡は確認できず⁵⁶、遼東からの軍糧船運実施を示す記録も見当たらない。以上のことから、この段階では、明からの軍糧輸送は実現しなかったとみてよい。

2) 義州・定州間での軍糧供給

さて、そうすると明軍への軍糧供給は朝鮮だけで担当しなければならない。引き続き、朝鮮政府の動きをみていこう。

7月4日、柳成龍は明軍に供給する軍糧調達のために平安道内各邑の備蓄穀を再配置する策を提案した。『宣祖実録』には次のように記されている⁵⁷。

J₁

豊原府院君柳成龍啓曰、定州距亀城最近、天兵所経一路、亦惟此处為留住之所、而本州倉穀甚少、今不得已先添定州之穀、然後可以支応天兵、定州之穀既足、則又当分置于宣川・郭山等处、此則自可觀勢為之矣、各官之民、今頗還集云、令其守令設為方便、稍稍輸運事、知委于調度使、且從事官洪宗祿、時在昌城、亦令馳到亀城、与調度使同力刻日輸運後、具数啓聞事、急急下書何如、答曰、依啓、(『宣祖実録』卷28、25年7月辛酉〔4日〕条)

J₂

柳成龍啓曰、臣近見從事官洪宗祿牒報、昌城倉穀白米・田米合万餘石、朔州倉穀田米四千九百餘石・白造米各七百五十餘石・蒸米一百二十餘石、両邑馬豆合七千餘石、以此両邑之穀、足以支持万兵数月之糧、只是道里寫遠、人馬不俱輸運為難耳、然昌城之穀、可以從船路、順流而下数日可達義州、朔州則必輸運於亀城、又自亀城輸到定州、其勢似便、但亀城之穀、其数自多、今姑置朔州之穀、先輸亀城倉穀於定州・博川、則可以支持天兵、請令調度使、及時措置、答曰、依啓、不但収聚於定州、如宣川・郭山分置如何、且聞百姓還集云、令各其守令負持以輸如何、(『宣祖実録』卷28、25年7月辛酉〔4日〕条)

まず史料 J₁にみえる柳成龍の上啓では、定州は亀城にもっとも近く、南下する明軍が駐留する場所となるが、備蓄穀が僅少であるので亀城穀を定州に移し、明軍を支供するに十分な額の糧

⁵⁵ 『宣祖実録』卷27、25年7月戊午(1日)条。ちなみに、夏時ら一行は、朝鮮による日本嚮導の真偽を探るために朝鮮へ派遣された。

⁵⁶ 本文中の後掲史料 K₂によれば、遼東からの咨文に朝鮮での軍糧不足を考慮して明軍兵士に「乾粮」を持参させたいとする旨が記されていたとあるが、これはあくまで足りない軍糧を補うものであり、本格的な明からの軍糧提供とはいえない。

⁵⁷ ここでは『宣祖実録』から引用したが、『懲毖録』にも柳成龍によるほぼ同文の状啓が収録されている。『懲毖録』卷3、芹曝集、啓辞「定州粮穀添備啓」および「亀城粮穀形止及請褒奨自願従軍人啓^{壬辰七月三日}」。

穀を得たのち、宣川・郭山などにその残餘を分置すべきであることが述べられている。あわせて、亀城から定州への軍糧輸送に関して、昌城に滞在中の従事官洪宗祿を亀城に急派し、調度使⁵⁸と協力して輸送にあたらせたのち、彼をしてその輸送額を政府に報告させるよう命じることを請うている。これは宣祖の裁可を得た。

次に史料 J₂をみると、柳成龍は洪宗祿からの報告にもとづいて、昌城の官倉に白米(精白米)・田米(粟)あわせて1万餘石、朔州の官倉に田米4,900餘石、白米・造米(玄米)各750餘石、蒸米(濡れ米を乾燥させたもの)120餘石がそれぞれ備蓄されており、また、これら2邑には馬豆7000餘石も存在していること、そしてそれだけの糧穀があれば兵士1万人の数か月分の軍糧が賄えると述べている。

そして、①昌城・朔州は遠隔の地であり陸路の輸送は困難をとまなうが、昌城穀の場合は鴨緑江の流れに従って船で下れば数日で義州に運べる、②一方の朔州穀は亀城に輸送すべきであり、さらにそれを亀城から定州へ輸送するのが便益だが、亀城には備蓄穀が多いのでしばらく朔州穀はそのままとし、亀城穀の定州・博川への輸送を優先すれば明軍を支持できる、との2点を指摘して、それを調度使に命じて時期をみて実施することを請うた。

宣祖は基本的にこの提案を受け入れたようで、ただ、定州のみならず宣川と郭山にも糧穀を分置することと、輸送は当該邑の守令の責任で実施することの是非を問うている。前者はすでに柳成龍が提案したものであり、それを再確認したにすぎない。

ともあれ、柳成龍のこの提案は、明軍が義州・定州ルートを通じて南下するとの前提のもとに、平安南道内各邑の官穀を定州と義州の2か所ないしその付近の邑に集中させようというものだった。このうち定州の場合、前掲の史料 G では備蓄穀がまったくないとされ、史料 J₁でも「甚少」といわれていた。しかし、柳成龍の提案がそのまま実施に移されたとすれば、亀城穀が定州に搬入されることになり、さらにそれでも不足する場合には朔州からも輸送できる目処が立ったことで、定州の軍糧調達問題は一段落した。

また、義州については、さきの史料 H によれば、義州にはすでに兵士1万人の1か月分に相当する額、推算するに2～3万石の穀物が存在していたので、柳成龍の提案どおり昌城穀1万餘石が義州に輸送されれば、3～4万石程度の糧穀が義州に備蓄されるはずだった。

さて、柳成龍の提案から2日後の7月6日、備辺司およびまたも柳成龍によって明軍への軍糧供給をめぐる上啓が相次いでなされた⁵⁹。

K₁

備辺司啓曰、金信元之往于三県、本非朝廷所令、今者馳啓、至欲出死力糾義兵、目今天兵粮料方急、三県之穀、催促船運於定州・安州等处、天兵若往平壤、則其処粮餉、亦令信元極力措置、答曰、依啓、(『宣祖実録』)

⁵⁸ 当時調度使には洪世祿・洪世恭・沈友勝の3人が任命されていたが、ここでの調度使はそのいずれであるかは特定できない。

⁵⁹ ここでは『宣祖実録』から引用したが、史料 K₂については『懲毖録』にも柳成龍によるほぼ同文の状啓が載せられている。『懲毖録』巻3、芹曝集、啓辭「請遣従事官整齐一路芻粮啓」。

録』卷28、25年7月癸亥〔6日〕条)

K₂

豊原府院君柳成龍啓曰、沿道各官、見儲軍糧、惟義州最優、定州則雖名大邑、而時存只二百餘石、龜城之穀、若及期輸運、則似可接濟、臣意、天兵發行時、自義州齎三日糧、初日宿良策、而龍川添給一日糧、則三日糧猶在、第二日宿林畔、宣川又添給一日糧、如良策、則三日糧猶在、到定州、嘉山又如之、安州則以私船隻輸運龍岡三県之穀五六百石、泊于老江下流、天兵臨到之時、又支給于安州、則是沿途自義州至安州、皆以其處之穀支給、而義州所齎三日之糧、則依旧猶存、足可及到於平壤、賊若望大軍之來、棄城南逃、則平壤餘穀、可以接濟、仮使不然、天兵既到城下、三県之穀、人負馬載、不患難運、計實無便於此者、伏見遼東咨文、亦以我國糧餉不敷、至欲齎持乾糧、其委曲方便、欲濟大事之意至矣、以此明言曲折於天將、則似無不從之理矣、但馬料則持去似重、當於各站備待、以此意義如何、前日康士雍之去、臣即令船運三県白米六百石、輸到定州、已運龜城之穀、則雖非三県之穀、可以支給、三県之穀、則姑令移泊于安州近處以待、事甚便当、議于大臣、則其意亦然、但必須別遣一人、如宣伝官之類、專掌為之、然後可以及時矣、臣病歇、則自當驅馳道路、親自檢飭、而不幸病勢如此、從事官辛慶晋、使之先期馳去、整齊為當、故敢啓、答曰、依啓、辛慶晋亦為發送、(『宣祖實録』卷28、25年7月癸亥〔6日〕条)

まず史料 K₁ の備辺司上啓は、金信元なる人物がみずから進んで「三県」すなわち平壤付近の3邑(龍岡・江西・咸從)に赴き、死力を尽くして義兵を糾合しようとしているが、明軍の軍糧問題が緊急を要するので、その金信元に命じて「三県」の糧穀を定州・安州等に輸送させること、そして、明軍の平壤奪還後も彼に軍糧の措置を委ねることを請い、宣祖の裁可を得た。

一方、史料 K₂ の柳成龍の上啓では、①明軍が義州から平壤へ進軍する際の軍糧供給方式、②平壤到着後の軍糧措置、③明軍の「乾糧」持参、④「三県」穀の定州への輸送、⑤糧穀関連の事務を専掌する官吏の派遣、などについての彼の提案や意見が述べられている。

このうち、まず注目されるのは①である。ここでは、明軍が義州を出発する際に、義州でまず3日分の軍糧を支給し、翌日、龍川でさらに1日分を支給、その翌日に宣川でまた1日分を支給する、という軍糧供給方式を採用することが提案されている。定州・嘉山でも同様の方法を続け、安州には「龍岡三県」穀5～600石を私船によって輸送し、老江下流に待機させておき、明軍の定州到着後にこれを支給する。このような軍糧供給方式をとれば、明軍兵士はつねに3日分の軍糧を所持していることになり、平壤までの進軍が可能である、というのである。

これまで朝鮮政府では、もっぱら明軍のための軍糧をいかに調達・確保するかという点に議論が集中していたが、そうやって確保した軍糧をどのように明軍兵士へ支給するかについて、具体的な提案がなされたのは管見の限りこれが最初である。

②の明軍の平壤到着後の軍糧措置としては、明の大軍が平壤に迫れば日本軍は城を棄てて南へ逃がれるかもしれない、そうなれば平壤に備蓄してある穀物が使用可能となるし、もし日本軍が退却しなくても「三県」穀を人馬で平壤まで運ぶのはさほどむずかしくない、とする。

③は、遼東都指揮司からの咨文に、朝鮮の軍糧不足を考慮して明軍兵士に「乾糧」を持参させたいとあったことに対し、これを「委曲方便、欲濟大事之意至矣」と評価して、このことを詳しく明將

に明言すれば、明将がこれに従わない理はないだろうと述べている。ただし、馬料については、重くて持参するのが不可能なので、各站で準備すべきであるという。

さきに、明から夏時・参将黄応陽・徐一貫等が義州を訪れた際⁶⁰、宣祖が兵力のみならず軍糧の提供を明に求めたことをみたが(前掲史料 I)、そうした要求が実現した形跡はないものの、朝鮮の軍糧不足を補う程度の軽易な措置は、明側でも検討されていたことが知られよう。もっとも、明将に対して朝鮮政府がこのことを実際に申し入れたのか、あるいは実際に明軍が「乾粮」を持参したのかどうかは不明である。

次の④は、史料 K₁の備辺司上啓に対する内容となっている。すなわち、これよりさき、柳成龍の指示によって康士雍なる人物が「三県」に赴き、白米600石を定州に船運し終えており、亀城穀もすでに定州に輸送されているので、「三県」穀をわざわざ定州に輸送する必要はなく、「三県」穀は船運して安州付近に停泊させておくのがよい、と主張する。

これによって、さきの史料 J₁J₂にあった柳成龍の提案が早くも実施に移されていたこと⁶¹、そして、定州には亀城のみならず南部の龍岡・江西・咸徒などからも糧穀が輸送されていた事実がわかる。

最後の⑤では、ここまで柳成龍が述べてきたような平安道内での軍糧問題全般を専掌するために担当の官を別途派遣することが必要であり、柳成龍自身がその任に当たるべきではあるが、病のためにはたせないとして⁶²、従事官辛慶晋を派遣することを請うている。

この点については、同日あとになって、まずこの日のうちに辛慶晋を派遣するが、みずからも翌朝(7日)赴任することを柳成龍自身があらために宣祖に請願し、裁可を得た⁶³。

ところで、いまも述べたように、さきの史料 J₁J₂における柳成龍の提案(亀城穀・朔州穀を定州へ、昌城穀を義州へ輸送する)のうち、亀州穀の定州への輸送がすでに完了していたことは史料 K₂から明らかである。だとすれば、具体的にどのくらいの額の軍糧が定州へ輸送されたのだろうか。この点については、『懲毖録』に収められた柳成龍の次の状啓によって確認できる。

L

七月初九日、同副承旨成貼有旨書状、臣在定州祇受、唐兵支持糧料、自義州、良策・車輦・林畔、各備五千人一日之糧、仮家釜鼎柴草等物、略已措辦、定州則白米五十石・造米五十石・田米五百三十六石、従事官洪宗禄与府使尹承吉、從亀城同力措置、亦已輸到、此乃五千兵六日之糧、(後略)(『懲毖録』卷6、辰巳錄

⁶⁰ 『宣祖実録』卷27、25年7月戊午(1日)条。ちなみに、夏時ら一行は、朝鮮による日本嚮導の真偽を探るために朝鮮へ派遣された。

⁶¹ このことは、『懲毖録』卷1の次の記述からも明らかである。

進至定州、洪宗禄、尽起亀城人、輸運馬豆及小米、到定州・嘉山者、已二千餘石矣、

⁶² 後掲史料 N には「臣所患痔瘡」とあり、柳成龍はこのとき痔疾を患っていたようである。

⁶³ 『宣祖実録』卷28、25年7月癸亥(6日)条には次のように記す。

柳成龍啓曰、臣伏覲伝教、以天兵粮餉支持事急、縁臣有病、欲令左相尹斗寿、出而措置、但沿途粮料、臣自前勾管、必無不及之理、且臣雖有病、未死之前、自当限力驅馳而 行在接応緊関之事、不但粮料一事、三公之中、只有左相一人、豈可出外臣、今日先遣辛慶晋、明曉力疾随行、不至遲緩、答曰、依啓、
なお、ここにみえる柳成龍の状啓は『懲毖録』にも収録されている。『懲毖録』卷3、芹曝集、啓辞「請自行措置粮餉啓^{壬辰七月六日}」。

「一路軍糧措置緣由及留定州調病前進狀^{七月十三日}」)

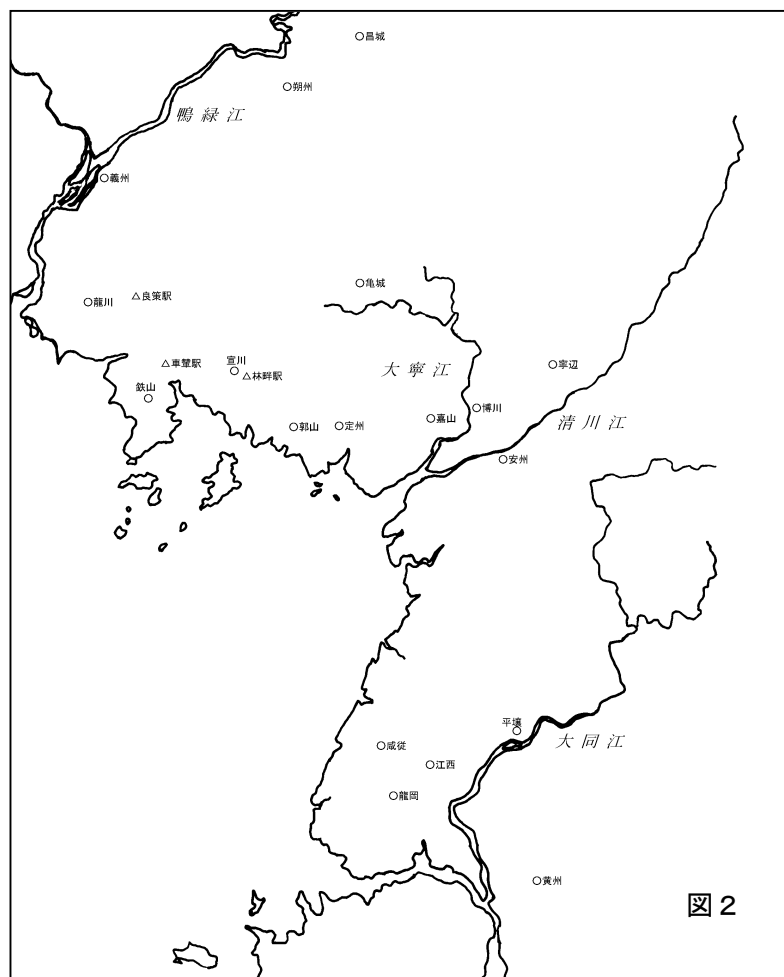
前述のように、柳成龍は7月6日、平安道内の軍糧問題全般を管掌すべく病をおして義州を発つことを宣祖に請い、裁可を得た(前掲史料 K₂)。そして、予定どおり7日早朝に義州を発ち、同日中に義州の南33里(約13.2km)⁶⁴に位置する所串駅⁶⁵に達し⁶⁶、9日には定州に到着していた。史料 L は、彼が定州滞在中の7月13日に送ったものである。

これによれば、7月13日現在、定州には亀城から白米50石、造米50石、田米536石が移送されてきており、これは兵士5,000人の6日分の軍糧に相当するという。それだけではなく、義州・定州間に位置する良策(龍川)・車輦(鉄山)・林畔(宣川)の各駅にも、それぞれ兵士5,000人の1日分に当たる軍糧が配備されていた。

この事実から、定州および義州からそこに至る沿道の諸邑については、さきの柳成龍の提案(前掲史料 J₁K₂)にほぼ沿った形で軍糧の確保が実際に進んでいたことがわかる。一方、義州の場合はどうだったのだろうか。次の記録をみると、さきに柳成龍が提案していた昌城穀の義州輸送(前掲史料 J₂)も、ときを移さず始まっていたようである。

M

備辺司啓曰、義州雖有儲穀、天兵千名、方在此處、而行在用度亦繁、繼用之策、不可少緩、已令輸運昌城米三百石、而厥數亦少、朔州白米二百石、昌城加一百石、即時輸運之意、行移何如、答曰、依啓、(『宣祖實録』卷28、25年7月甲子〔7日〕条)



⁶⁴ 朝鮮里は日本里の約1/10に相当する。

⁶⁵ 『新增東国輿地勝覧』卷53、平安道義州牧駅院条の「所串駅」割註に「在州南三十三里」とある。

⁶⁶ 後掲註67の引用史料冒頭部分を参照。

前掲史料 K₂では、柳成龍は義州の糧穀備蓄状況について「沿道各官、見儲軍糧、惟義州最優」と述べており(前掲史料 K₂)、昌城穀の義州輸送はそれほど急を要することとは考えていなかったようにも受け取れるが、史料 M によれば、柳成龍の提案が出された3日後の7月7日には、昌城の米300石を義州へ輸送することがすでに下命されていた。ただ、さきの柳成龍の提案には、昌城には1万餘石の白米・田米があるとあったので(前掲史料 J₂)、300石はそのわずか3%にすぎない。備辺司の上啓にもこれだけでは少ないとあり、朔州の白米200石と昌城穀100石をすぐさま義州へ輸送することが要請されている。

ところで、昌城から義州への糧穀輸送には鴨緑江の船運を利用することが想定されていた(前掲史料 J₂)。しかし、1万石もの大量の糧穀を一度に輸送するには、当然ながら大量の船舶と労働力が確保されねばならない。史料 M からは、糧穀は存在しても輸送能力がそれに追いつかない状況を読み取ることができないだろうか。定州はともかく、義州への軍糧配備については、実際には必ずしも思うように進んでいなかったと思われる。また、実際に義州に集められた軍糧の具体的な額についても不明である。

3) 定州以南および黄海道での軍糧供給

以上のように、義州に関しては必ずしも順調ではなかった印象を受けるにせよ、とにかく朝鮮政府は、義州と定州、そして義州・定州ルートの沿道に位置する諸邑に対して平安道内の糧穀を集中させる政策を実施しており、義州・定州間での軍糧供給については政府として可能な限りの措置を講じたとみてよい⁶⁷。しかし、そのさき、嘉山・安州を経て平壤に至る区間については、まだ十分な軍糧の調達が進んでいない状況にあった。

もちろん、さきにみたように、すでにこの区間の軍糧供給策についても朝鮮政府内で議論はされており、具体的な対策も提示されていた。「龍岡三県」穀5～600石を私船で安州へ輸送し、これを老江下流に待機させておいて明軍の定州到着後に支給するという柳成龍の提案がそうである(前掲史料 J₂)。これについては、備辺司が金信元に「三県」穀の定州・安州等への輸送を命じることを宣祖に請うて裁可され(前掲史料 K₁)、それに対してさらに柳成龍が、「三県」穀は船運して安州付近に停泊させておくのがよいとする意見を提示していた(前掲史料 K₂)。しかし、この「三県」穀の安州移送は実際には進んでおらず、この区間の軍糧調達状況はかなり憂慮されるべき状態にあった。

⁶⁷ もっとも、平安道内の軍糧調達責任者だった柳成龍にとっては、それでも安心できる状態ではなかったようである。彼が7月8日に所申駈から送った状啓には次のように記されている。

臣昨日病甚、不能遠行、艱到所申、今日待病勢少歇、将向良策、道路応行之事、已為移文、再三知委、且令從事官辛慶晋、先去料理、臣隨後点視計料、大抵自義州至定州糧料、雖百計措置、僅可支給四五千兵馬之食、万一天兵多数越江、而尽出此路、則支持之事、極為可慮、(後略)(『懲毖錄』卷6、辰巳録「所申駈陳運糧便宜及請咸從校生崔忠国等褒賞勸勸状」七月八日)

すなわち、義州・定州間の備蓄軍糧を4,000～5,000人の兵馬に支給できる額であるとする点は前掲史料 L とも一致するが、柳成龍によれば、「百計措置」したにもかかわらず確保できたのはせいぜいその程度であり、明の大軍がやって来た場合には支持について憂慮されると述べている。

N

(前略)嘉山郡倉穀、散失殆尽、軍糧則以定州所有可推移齎持、而馬豆則本州見在之數僅千餘石、恐有不足之憂、安州糧穀多少、尚無來報、尤為可慮、臣見近日陰雨連綿、處處川渠漲溢、万一未易開霽、而許多兵馬、久留一處、則數少糧餉、繼備無路、極為悶迫、三鼎穀、輸運於安州事、亦連續遣宣伝官及軍官督促、而時未知來泊与否、(中略)臣賤疾猶未少差、艱到定州、不得已留一二日、待歇前進于嘉山・安州等處、檢察凡事計料、(『懲毖録』卷6、辰巳録「一路軍糧措置緣由及留定州調病前進狀^{七月十三日}」)

史料Nは、さきに史料Lとして引用した柳成龍の状啓の後半、史料Lでは省略された部分である。柳成龍はここで、定州以南の嘉山と安州では十分な軍糧が確保されていないことを指摘する。

まず、嘉山の場合、郡倉の備蓄穀は蕩尽しているという。宣祖一行が嘉山に滞在していた6月16日段階では、嘉山には5～600石の軍糧備蓄があるとする嘉山郡守沈信謙の発言が柳成龍によって紹介されていたが(前掲史料G)、それらの糧穀は、宣祖一行が嘉山を離れた直後、叛乱民によって掠奪されてしまったのである⁶⁸。柳成龍は、兵士の食べる糧穀については定州から嘉山へ糧穀を輸送することも可能だが、軍馬の飼料穀は定州にも千餘石しかなく、不足する恐れがあると指摘する。

一方、安州については、安州所在の備蓄額について報告が届いておらず、もっとも憂慮すべきであると述べている。「三鼎」穀の安州移送についても、宣伝官・軍官を派遣して督促しているがいまだ来泊したとの情報は得ていないとある。

嘉山・安州ともに事態は看過できない状態だったが、柳成龍にとっては、安州の軍糧備蓄状況を把握できないことがより問題だった。彼は前掲史料Nと同日、もう1通の状啓を宣祖へ送っているが、次にそれをみてみたい。

O

本月十一日右副承旨成貼有旨書狀、臣在定州祇受、江辺土兵及各官起送精兵、觀察使李元翼・兵使李贊太半領率已在安州、惟元帥金命元在此等候唐將 天兵今日巳時自林畔已到此处、明曉欲發向嘉山矣、(中略)惟三鼎倉穀、回泊安州之事、尚無回報、海道之事、慮難及期、適調度使洪世恭、始於昨日來到、因使洪世恭、先去安州催促、其餘干係軍機事、則与金命元、相議区処計料、臣所患痔瘡、數日來加重、不能運身、欲待少歇進去嘉山、而難可預期、恐誤大事、不勝憂悶、(『懲毖録』卷6、辰巳録「有旨祇受及使洪世恭往安聚催運糧餉狀^{七月十三日在定州}」)

⁶⁸ 『懲毖録』卷1には次のように記す。

是日、駕發嘉山、郡守沈信謙、謂余曰、此郡糧穀頗優、官庁亦有白米一千石、欲以此餉天兵、不幸事至於此、公若少留鎮定、則邑人不敢動、不然乱作、小人亦不敢留此、將向海辺躲避矣、時信謙已不能令其下矣、独余所帶軍官六人及路中所收潰卒十九人、余約束使之自隨、故各帶弓箭在傍、信謙欲藉此自護、故云然、余不忍遽發、少坐大門、日已過午、更念無上命、而擅留不行、於義未安、遂与信謙別、行上曉星嶺、回望嘉山、則郡中已乱矣、信謙尽失倉穀而逃、

明軍はすでに定州まで達しているのに、「三鼎」穀の安州移送については報告がなく、安州到着までに軍糧が調達できるかどうかが憂慮されるとある。そこで柳成龍は、たまたま定州に到着した調度使洪世恭を安州へ派遣し、現状報告を催促すると述べている。

これら史料 N,O から明らかなように、定州より南、とくに嘉山・安州以南での明軍への軍糧調達については、明軍の到来を目前に控えつつもいまだ十分な措置がとられておらず、柳成龍はそれを強く憂慮していた。しかし、柳成龍の憂慮とは裏腹に、これらの状啓を受け取った朝鮮政府側でとくにこのことについて議論された形跡はみられない。平安道内の軍糧調達については柳成龍に一任されていたためかもしれないが、政府内の関心はすでに、平壤回復後、明軍がさらに南下して黄海道に入ったのちの軍糧問題へと移っていたこととも関係があろう。

黄海道での軍糧調達・輸送に関する朝鮮政府内の議論は7月11日から確認できる。次の記録をみてみよう。

P

伝曰、平壤之賊、若得駆逐、黄海道軍糧不足、聞忠清道牙山倉税米多積云、令本道監司、載船分泊於天兵或我兵随所到处、繼餉之意、令備辺司、速為議処、備辺司回啓曰、臣等意、不及遠每、以平壤之賊為驅逐之後、黄海道軍糧、則龍岡儲穀甚優、計欲移用於黄海道矣、牙山倉税米雖多、海路風汎、不可定期瓮津到泊、牙山税米一千二百石、如未過長山串、則令黄海監司措処、或泊於白川、或泊於京江、随我兵所到繼餉何如、答曰、依啓、牙山税米、今雖未及、即令分載、而中流海路、觀勢応用事、並為下書、(『宣祖実録』卷28、25年7月戊辰〔11日〕条)

この日、宣祖は黄海道の軍糧不足を忠清道牙山倉の田税穀によって補う措置について備辺司に諮問した。牙山倉の田税穀といえば、去る5月13日、備辺司の要請によって、牙山倉の漕運船団を黄海道觀察使に命じて西海海路に指送させる措置がとられたことが想起されよう(前掲史料B)。そのときは、牙山倉の田税穀を当時行在所のあった平壤に輸送することが企図されていた。しかし、その後間もなく平壤は陥落し、宣祖一行は義州にまで避難した。その間、この漕運船団が運んでいた田税穀の取り扱いについてはまったく議論されないままだった。そうしたなか、平壤回復後にこの漕運船団の田税穀を明軍および朝鮮官軍の駐屯地に輸送して軍糧に充当することが、まったく新しい案として宣祖から示されたのである。

この伝旨に対して備辺司は、平安道龍岡の備蓄穀に余裕があるので、これを黄海道に移給するという対案を示した。そして、牙山倉の田税穀1,200石については、海路を輸送する関係上、期限を定めて黄海道瓮津に到着させることは不可能なので、もしも漕運船団がまだ長山串を通過していなければ、黄海道觀察使に命じて黄海道白川もしくは京江(漢江の漢城付近での呼称)に停泊させ、朝鮮官軍の進行に従って軍糧として支給することを提案した。宣祖もこれに応じ、牙山倉の田税穀は漕運船に分載させたまま海上に待機させ、状況をみて対応することとした。

ところが、間もなくしてこの漕運船団は定州に姿を現した。この件について『宣祖実録』にはまっ

たく記録がないが、『懲毖録』には次のようにみえる。

Q₁

進至定州、洪宗祿、尽起龜城人、輸運馬豆及小米、到定州・嘉山者、已二千餘石矣、余猶以安州以後為憂、適忠清道牙山倉稅米全一千二百石、載船、將向行在、到泊於定州立岳、余喜甚、即馳啓曰、遠穀適至如期、是天贊中興之運、請擇取以補軍餉、令守門將姜士雄、馳去立岳、分運二百石定州、二百石嘉山、八百石於安州、安州即以近賊、姑令停船水中、以待之、(『懲毖録』卷1)

Q₂

臣既為祗受書狀後、即因忠清道進上陪去人所言、聞牙山倉白米一千二百石、已泊于定州立巖地、距定州三十里許、若乘潮回泊于安州、則一日可到、臣方以安州以後糧餉接濟為憂、遠道許多糧船、如期適到、必是天贊国家中興之運、不勝喜幸、即時發遣守門將康士雍及臣帶率軍官、使之馳去、令於明日內到泊于安州、此船既到安州、則軍糧自為可繼、而順安阜亦有馬豆一千餘石、人馬所需、皆無匱乏之憂、(後略)(『懲毖録』卷6、辰巳錄「馳啓牙山糧船到泊緣由及發遣曹好益召募江東等處軍兵且請洪世恭勿通調度使仍舊察任狀^{同日}」)

すなわち、史料 Q₁によれば、牙山倉の田税穀を載せた漕運船団が、行在所をめざして航海の途中、定州の立岳(あるいは立巖)に寄港したため、定州に滞在中だった柳成龍は、その積み荷1,200石のうち定州・嘉山にそれぞれ200石、安州に800石を分運することとした。ただし、安州へ運ぶ800石については、安州が日本軍の駐屯地に近いため、しばらく船に搭載したまま海上に待機させる措置をとった。

史料 Q₁の冒頭にあるように、定州・嘉山へ軍糧集積はすでに柳成龍の命を受けた洪宗祿によってなされていたが(これは前掲史料 J₂の後半部分の記述に対応する)、前掲史料 NO の記述からも明らかのように、柳成龍は安州以南の軍糧確保に強い懸念を抱いていた。前掲史料 NO と同日に書かれた状啓である史料 Q₂の文面にも、そうした懸念はよく表れている。牙山倉漕運船団の定州寄港は、このような柳成龍の憂慮・懸念を払拭して事態を大きく改善してくれる、文字どおりの僥倖だったといえよう。「天贊国家中興之運」という表現はあながち誇張とも思われない。

それはともかく、これらの史料から明らかのように、牙山倉の漕運船団はすでに黄海道を通過してしまっていた。そのために前掲史料 P にみえる備辺司の提案は活かされることなく、積み荷の田税穀1,200石はその大半が安州の軍糧に充当され、一部は定州・嘉山へ運ばれた。牙山倉の田税穀1,200石は、黄海道の軍糧としてはまったく用いられなかったのである。

黄海道での軍糧供給策としては、龍岡の餘剩穀を黄海道に移給する措置のみが決定したにすぎず、いずれ実現するだろう明軍の南進を考えるならば、黄海道の軍糧問題がこれで解決したとはいえない状況だった。備辺司が、黄海道軍糧問題の担当官吏を現地に派遣することを要求したのもそのためだろう。

R

備辺司啓曰、黄海道措処之事最急、而堂上中可遣者絶少、沈喜寿、則接待天将、李礪則方病、同副承旨柳

永慶、可堪委寄之命、差遣為当、軍官四人、亦令帶去何如、上允之、使稱為巡察使『宣祖實錄』卷28、25年7月甲戌〔17日〕条)

史料 R にみえるように、7月17日、備辺司の要求は宣祖の裁可を得て、巡察使として同副承旨柳永慶を黃海道に派遣することが決定した。

このような朝鮮政府の議論をみると、朝鮮政府は明軍の平壤奪回をすでに約束されたこととみなし、さらにそのさきまでを見通して軍糧供給策を検討していたことが窺える。これは、明軍が南進を開始し、平壤奪回が目前に迫っていたことを反映している。現に、祖承訓率いる明軍の兵馬3,000騎はこのときすでに嘉山にまで達しており、まさにこの日、日本軍の占拠する平壤城へ攻め込んだ⁶⁹。しかし、朝鮮政府の予想に反して、この攻撃は失敗に終わる。遊撃史儒は戦死し、祖承訓は安州に退却して、遼東へ帰還しようとした⁷⁰。

明軍の平壤奪回失敗によって、軍糧問題はまた新たな局面へと転換した。明に対して再度の救援を要請するにあたり、朝鮮政府ではそのための軍糧調達が再び大きな課題として議論された⁷¹。10月に李如松の朝鮮派遣が決定し⁷²、12月に明軍の大部隊が朝鮮に入った⁷³のちには、朝鮮政府はそれまで以上に来援明軍への軍糧供給に苦慮しなければならなくなるのである。

IV. むすび

以上、本稿では、文禄・慶長の役における朝鮮側の軍糧供給体制について、研究の現状と課題を整理し、さらに、開戦初期において朝鮮政府ではこの問題をめぐってどのような議論がなされ、どのような政策が実施されたのかをやや詳しくみてきた。これまで述べてきたことを要約してむすびとしたい。

まず、文禄・慶長の役における朝鮮側の軍糧供給体制に関する研究としては、現在までに韓国人研究者によって数編の専論が発表されている。本稿ではそのうち代表的な3編の論文の内容を検討した。3編の論文はいずれもこの戦争の全期間を対象とし、朝鮮官軍・来援明軍への軍糧調達・輸送政策の内容とその推移、あるいは、朝鮮軍・日本軍・明軍それぞれの軍糧調達策が朝鮮社会におよぼした影響などを解明しようとしたものである。これらの研究によって、文禄・慶長の役期間中における朝鮮政府の軍糧供給体制の概要とその時期的推移はほぼ明らかにされたといつてよい。

しかしながら、それはあくまで概要であり、朝鮮政府内で軍糧調達・輸送をめぐってどのような議論がなされ、それが実際の政策にどのように反映されたのかを、そのときどきの戦況や政治的状

⁶⁹ 『宣祖実録』卷28、25年7月丁丑(20日)条。『宣祖修正実録』卷26、25年7月条。

⁷⁰ 『宣祖実録』卷28、25年7月丁丑(20日)条。北島万次、前掲書、114-116頁。

⁷¹ 早くも7月26日には、明軍の再度の来援を請うために軍両問題が朝議で議論されている。『宣祖実録』卷27、25年7月癸未(26日)条。

⁷² 『明史』卷5、本紀16、神宗万曆20年10月壬寅(16日)条。

⁷³ 『宣祖実録』卷33、25年12月辛亥(25日)条。

況に即して微視的に検討するという課題は今後に残されたままである。また、既往の研究は主として中央政府レベルでの軍糧調達・輸送政策を論じるのみで、各地域・各部隊単位に現場の指揮官や義兵将がどのような軍糧供給体制をとっていたのかという点になると、いまだほとんど明らかにされていない。そうした面からの微視的な研究もまた必要である。

次に、本稿では如上の課題のうち、とくに前者について若干の考察を試みた。宣祖25年(1592)4月の開戦以後、同年7月の明将祖承訓による平壤奪回失敗までの約3か月間を対象として、おもに『宣祖実録』の記事に依拠しつつ、軍糧供給問題をめぐる朝鮮政府の動きを跡づけてみた。そこで明らかになったことは、おおよそ次の3点にまとめられる。

(1) 朝鮮政府内で軍糧問題が本格的に議論されるようになるのは、開戦から約1か月を経て宣祖が平壤に避難したのちのことである。まず、行在所での諸経費財源と軍糧の確保のための措置として、たまたま漕運途上にあった忠清道牙山倉の田税穀を活用することが下命された。しかし、この田税穀が平壤に届かないうちに、宣祖一行はさらに北への避難を餘儀なくされた。

次いで、北上する日本軍への反撃・迎撃態勢を整えるために、黄海道・江原道の漕倉穀や屯田の収穫穀などが軍糧に充てられることになった。軍糧の調達先や調達額はしだいに拡大・増加する傾向にあり、当面必要な軍糧の調達には成功した。しかし、その輸送は必ずしも容易ではなく、対策として「三江」私船を動員する措置などが試みられた。その結果、最終的には十餘万石の軍糧が平壤に集積された。

(2) 5月下旬、朝鮮軍が臨津江の戦いに敗れ、日本軍が平壤に迫るにともない、宣祖一行は寧辺・博川・嘉山を経て義州まで避難した。その間、6月になると明から朝鮮救援の意向が伝えられ、6月中旬、来援明軍による鴨緑江の渡江が始まった。こうした状況の変化にともない、朝鮮政府では新たに来援明軍への軍糧供給問題が重要な課題とされるに至った。明軍の鴨緑江渡江が開始されるのとはほぼ同時に、朝鮮政府でもこの問題についての議論が始まったが、当初その内容はかなり楽観的なものだった。しかし、義州・平壤間の明軍の進軍ルートにおいて重要な拠点となるべき定州に糧穀がほとんど備蓄されていないという現状が明らかになると、明軍が義州・定州ルートを通ずるとの前提のもと、義州と定州、および義州・定州ルートの沿道に位置する諸邑に平安道内各邑の糧穀を集中させる措置がとられることになった。こうして、定州と沿道諸邑にはある程度の糧穀が集積されたが、義州については必ずしも順調には進まなかった。軍糧は調達できても、その輸送力に限界があったためと推測される。

一方、こうした動きと並行して、朝鮮政府は明に対して軍糧の提供を要請した。しかし、少なくともこの時点でそれが実現した形跡はない。

(3) 朝鮮政府の軍糧調達は、定州より南、嘉山・安州を経て平壤に至る区間については、この段階ではほとんど進でならず、憂慮すべき状況にあった。しかし、柳成龍からの報告を受け取った朝鮮政府では、とくにこの件を問題にした形跡はみえない。すでに朝鮮政府の関

心は、明軍が平壤回復後、南進する際に通過する黄海道での軍糧供給に移っていた。黄海道での軍糧供給は7月以降、議論されるようになった。まず、かつて平壤の行在所への輸送が下命されていた牙山倉の田税穀を、黄海道の軍糧に充当することが宣祖から提起された。議論の末、黄海道へはひとまず平安道龍岡の餘剩穀を移給し、牙山倉の漕運船団はしばらく海上に待機させ、状況をみて対応することになったが。しかし、漕運船団はすでに黄海道を通過して平安道定州に達しており、結局この田税穀は、柳成龍の指示によって、軍糧の不足が懸念された安州をはじめ、平安道内の軍糧に充当された。

次に、黄海道の軍糧問題を現地に赴いて管掌する巡察使の派遣が決定した。朝鮮政府では、明軍の平壤奪回を既定の事実とみなし、明軍の南進に応じて、さきを見通した軍糧供給策を検討し始めたわけである。しかし、明軍の平壤奪回が失敗に終わったため、軍糧問題はまた新たな局面を迎えることになった。

討論記録

主題:「文禄慶長の役(壬辰倭乱)開戦初期における朝鮮側の軍糧供給体制」

(＊主題は分科会議での発表時のもの)

発表者:六反田豊委員

○日時: 2003年9月20日 10時—12時10分

○場所: ソウル 韓日歴史共同研究委員会事務局会議室

○参加者:

(日本側) 吉田光男委員、田代和生委員、六反田豊委員、伊藤幸司協力者、
橋本雄協力者、米谷均協力者

(韓国側) 孫承喆委員、趙珖委員、鄭求福委員、韓文鍾研究員、朴哲晄研究員、
洪性徳研究員

孫承喆 前回の討論でも討議時間が十分でなかったということで、できるだけ質問される方も短く簡単に質問していただき、今後討論される方も簡単に問題を出していただくことで、できるだけ全員が十分に意見交換、討論ができるように要領よく進めていければと思います。

今回の会議は録音をしていますが、前回の対馬での会議でも録音内容をあとから聞きますと、よく聞き取れない部分がありました。そこで、今回はきちんとした録音施設を整えましたので、皆さんもできましたらマイクに近づけてお話いただければと存じます。

それから質問と答弁の順序を決めてお話いただければと思います。前回は討論が激しくなると、あちらこちらからわーと声があがり、後でどういう内容なのか聞き取れないし、混乱することもありました。今回はまず通訳を行い、それを聞いてから意見をお話いただければと思います。

それではまず、韓国側の鄭求福先生に討論をお願いします。

鄭求福 事前に論文を読ませていただきましたし、また発表も伺いました。

本日の発表の内容は壬辰倭乱の軍糧についての既存の論文を検討し、その上でその時代を3つに分けたものでございました。その3つの時期の中で、本日の発表では第1期の部分を扱われました。そして実録と懲毖録等の資料を具体的に検討されました。微細的な研究として論文自体としては大変まとまった論文だと思います。

討論者として、いくつか質問したいと思います。まず、問題意識という面で問題点を指摘したいと思います。ここでの発表は、個人の学者としての論文ではなく、国家から研究委員として委嘱されて発表する論文です。であるならば少なくとも問題意識は日韓両国の

共通の問題として、異見のある問題を扱うべきだと思います。しかし、これはそれほど容易なことではないので、少なくとも研究史の部分においては日本と朝鮮側の研究史を比較検討していただければと思います。またこの論文では、第1期の初期の部分についてのみ扱われましたが、来年5月の研究終了時までには全期間についての内容を補充される予定なのかお伺いしたいと思います。

二つ目に、論文のタイトルは「軍糧供給体制」となっていますが、実際に扱われている内容は、軍糧の調達とその輸送についての状況説明にとどまっています。朝鮮側の軍糧供給体制は、平常時にはどのようなものであり、また戦時には非常体制はどのようなものだったのか、その変化についての言及がございませんでした。また報告者が研究対象とされた時期にあちこちで戦闘がありましたが、これに対する考慮がございませんでした。例えば李舜臣の海戦における軍糧米の調達と確保体制がどのようなものであったのか明らかにすべきであり、義兵闘争に関する軍糧問題はどのようなものであったのか等、全体的な鳥瞰図をお話していただければもっとよかったです。

もちろん報告者は、「朝鮮王朝実録を中心に」と述べておられますが、私は去る5月、対馬での会議の際に、歴史家は文献実証主義から脱皮すべきだという話を強調しました。このような原論的なお話を私が提起した理由は、実録の記録のみにたよって軍糧問題を扱った場合、その結果、今後日本の歴史教科書を執筆する学者に新しい誤解を招く素地があるからでございます。したがって、今後この論文を補完される際には、少なくとも水軍の軍糧確保問題や、義兵全体については難しいとしても個別の義兵の軍糧の調達などについても扱われる用意があるのかお伺いしたいと思います。

三つ目は用語についてです。まず第1点は来援明軍という用語ですが、もちろんこれは来援した明の軍人という意味で使われているのだと思います。しかし、それは全部一つにまとめて名詞形にして来援明軍と表現するのは不完全なのではないかと思います。このように、来援明軍というふうに名詞化して表現する理由はあるのでしょうか。

そして用語上のもう一つの問題は、日本語版論文の6頁の第3節の3行目(最終報告書236頁)でございます。「朝鮮は首都を平壤に遷都して」という記述がございます。朝鮮政府において遷都を宣言したことはありませんし、また歴史上の記録を見ても平壤に遷都したという記録はありません。したがって、この表現は朝鮮の国王が平壤に播遷した時ですか、朝鮮の国王が平壤にとどまっていた時という表現が正しいと思います。

四つ目ですが、私は去る5月の対馬での会議の際、壬辰倭乱について発表しました。その際、戦争の名称が、韓国、日本、明、3カ国が参加した国際戦争ですが、一つの戦争なので、各国がそれぞれの名称を用いるよりは、少なくともこの日韓歴史共同研究会の成果物においては、共同の名称を用いようと提案いたしました。代案として、当時三国で用いられていた干支により壬辰年に始まった戦争ということで壬辰戦争、あるいはこの壬辰戦乱、この二つを提案しました。これに対する日本側委員のご意見・見解を伺いたいと思います。以上です。

六反田 私の発表内容、論文に対して大変細かくいろいろ質問していただきました。まず最初に申し上げておかなければいけないことですが、先ほど鄭求福先生は私がこの壬辰倭乱、文禄・慶長の役を大きく三つの時期に分けたとおっしゃっていますが、それは正しくありません。三つの時期に分けたのは私ではなくて、金鎔坤さんです。これは日本語版の3頁のところに三つの時期に分けて考察したと紹介しただけで、私はその引き区分を認定するかしないかということは一とも言も述べておりませんので、このところは誤解があったと思います。それでこの点に関して私がどう考えるかということは、まだ私は分かりません。どういふふうに分けたらいいかというのは、まだそこまで私自身が資料もきちんと先のことは読んでおりませんので、どういふ分け方をするのがいいのかというのは、私にとってはこれからの課題です。

それから研究の視角の問題についてお話をされて、日本の研究史と韓国の研究史を比較した上で議論すべきではなかったかというご指摘をいただきましたが、少なくともこの朝鮮側の軍糧供給問題に対する日本の研究は全くありませんので、研究史の比較のしようがありません。それから日本軍の、もちろん日本軍の軍糧供給体制については中野等さんという研究者の方が論文をお書きになっていますが、これはもう私の能力不足でして、日本の資料を私は扱うことができませんので、その論文について特に論評するのは、ここでは意図的に避けさせていただきました。それは私が少なくともここで書かれた主題に関しては、日本の研究を直接論述する必要もないという、やはり日本軍の側の軍糧の問題ですから、私がここでテーマを掲げたことがいいか、それが妥当かそうでないかという問題はあるにしても、少なくとも朝鮮側の軍糧供給体制のことを論じるに当たっては、日本側の軍糧供給問題に関する研究内容を詳しく紹介する必要もないだろうという判断があります。

もちろんちょっと訳から漏れましたから繰り返しますが、その朝鮮側の軍糧供給体制のみをテーマにしたことがいいか悪いかという議論はあるかもしれません。それでたくさん質問していただいたので、私の研究は軍糧供給体制ということを扱うというといっているけれども、実態は調達と輸送の状況を述べたに過ぎないというご批判、これはまさにその通りでありまして、私はこの言葉、軍糧供給体制という用語が適切であったかどうかという問題はあると思いますが、私はその調達、軍糧米の調達と輸送を含めたシステムといえますか、それを軍糧供給体制という言葉でここで呼んでいます。

用語の問題はこれからまた考えたいと思います。特に体制という言葉を使ったのはちょっとやはり問題だったかなという気はします。それから、こういう問題を扱うのであれば、平常時のシステムとそれから戦時のものでどう違うのかということで比較すべきだという、まさにそれはその通りなんです、なにぶんにも、では、平常時の朝鮮の軍糧供給体制なるものの研究が、私が知らないだけかもしれませんが、どの程度あるんでしょうか。私自身がそこまでこの期間に確かにやれと言われれば、それはやらなければいけないことかもしれません。とてもそこまでは今回は手が回らなくてできておりません。この機会に、

もし平常時の朝鮮軍の軍糧供給体制に対する韓国側の何かいい研究などがありましたら是非ご教示お願いしたいと思います。

それから、私がこれを扱ったのは中央政府レベルでのもので、これと合わせて李舜臣の朝鮮水軍の軍糧調達であるとか、義兵の軍糧調達についても扱う必要があるとおっしゃいました。全くその通りだと思います。この問題も重要な問題だと思っています。それは私がこの発表の中で研究史の整備をして、課題として2つの課題を提示しているうちの——私はこういう言葉がいいかどうか分かりませんが——空間的な歴史的研究という言葉を使っていますが、そちらの必要性というものはここに書いて私も認めています。ですが、なにぶん限られた準備期間もそうですし、報告時間も限られている中でそこまで扱えというのは、ちょっとやはりかなり無理があります。

ですから、今回はわざわざここで断ったように、私が挙げた最初の課題について、その時期を限定して、そこでとりあえず可能な限り明らかにしてみようということであって、そもそもこの軍糧供給問題というのは、私から見ますと、そういう研究がまだこれからなすべき課題がいっぱいある分野だと思います。そのうちどこから手をつけるか、それを少しやったというに過ぎず、必要なことは私もよく認識しておりますので、それはおいおい資料を読んでやっていくしかないと思っています。おそらくこの問題で私は、研究書、単行書、最低でも1冊は書ける分野、もっと書けると思います。例えば、朝鮮政府の軍糧問題だけでも1冊の研究書は書ける。義兵だけでも1冊の本が書ける、そのくらいまだこれから解明していく課題が多い分野ではないかと私は考えています。

お答えの順番が逆になってしまいましたが、最初に質問された初期、ここに扱った時期だけで終わってしまっただけを最終的にまとめる時にはここで終わるのか、もっと先まで研究を進めるのかという質問ですけれども、それについては可能な限り先に、この初期だけではなくて先まで研究を進めたいと思っています。

孫承喆 すみませんが、時間が無いので短答式に簡単にお答えください。

六反田 わかりました。

ただし、先ほど鄭求福先生は実録だけを扱うのは問題だとおっしゃって、その通りであってこれはあくまでもそういう意味では中間報告であって、私自身もどこか注にも書いたと思うのですが、『宣祖実録』以外にも重要な史料はたくさんあります。だから、そういうもので、今度はこの期間に関しても中身を補っていきたいと考えております。

用語の問題がありますが、ひとつひとつ答えると長くなりますので、2点だけお答えをしておきます。遷都という言葉を使ったのは、これはもとになった史料にどう書いてあったか忘れましたが、確かに適切でなかったかもしれません。これは改めたいと思います。

それから戦争の名称ですが、これについては、先生が前回の研究集会でなさった提案については、提案としては私たちは聞いておりますが、ただ、この会で具体的に戦争の名称に何を使うかということはまだ合意ができていないと思いますので、少なくとも最初の段階で日本側では「文禄・慶長の役」、韓国側では「壬辰倭乱」を使うということで来

ていますので、私はそれに従っただけの話です。朝鮮側の問題を扱うのに「文禄・慶長の役」を使うのは私は個人的にはちょっと違和感もあるのですが、そういう問題はここでは置いておきまして、とりあえずご提案はご提案として聞いておりますけれども、そのことについては合意を得ていないのでそういう用語は使っておりません。時間があつたらもつといろいろお話ししたいことはあるのですが、とりあえずこのくらいで。

孫承喆 鄭求福先生の質問だけでも14分かかりました。それに対する答弁も18分ほどかかりました。

六反田 すみません。

孫承喆 これからは司会者の権限で質問5分、答弁5分ということにしたいと思います。マイクを切つてしまいます。

趙珖 司会者が指名してくれませんでした。時間の関係上お話を始めます。六反田先生の論文を読ませていただきました。今私が指摘しようとする内容には二つの意図がございます。

まず一つ目は、この初期の時期を扱った論文を完成させるのに少しでも参考になればという内容の指摘です。そして二つ目は今後軍糧問題に関する研究が続けられる場合に、きっと参考になるのではないかとということで意見を述べたいと思います。

まず一つ目の質問です。軍糧に対する理解の方向性についてです。先生は軍糧の調達と運送問題に主に関心をお持ちです。しかし、軍糧の調達と運送以外に、軍糧の消費先についても関心を持っていただきたいと思います。なぜならば軍糧は、軍隊の精餽用、軍人が直接食べる糧だけをさすのではなくて、後期になると訓練都監の軍人の給料、冬季の馬糧等も含む概念だからです。そして軍糧の用途は、時代と状況によって変わってくると考えられるからです。

2点目は研究の時代区分に関する問題です。先生は初期の区分のみを集中的に研究されています。しかし、この初期の部分だけでなく、この軍糧問題に対する全体的な時期区分がまず行われ、その時期の特性に対する意識がもう少し反映されればと思います。先生が取り扱われた時期は戦乱の初期ですので、明軍の場合は携帯の食糧がありました。これは乾糧といいます。後金軍の事例ではございますが、戦争に臨む際、軍人たちは少なくとも15日分の乾糧を自身が運搬しています。これは明軍の場合も同様です。また、明の輸送部隊による食糧運搬についても考えてみるならば軍糧問題が、後期とは差異のある時期を先生が扱われたことを念頭においていただければと思います。

些細なことですが、さらに何点か指摘したいと思います。まず石(こく)の内容についてです。軍糧の単位を石で示されましたが、同じ1石といっても、それが皮のついた穀物か皮をむいたものかによって、その給食能力は随分違ってきます。ここに提示されている石という単位が皮のついた状態なのか、皮をむいた状態なのかを意識していただきたいと思います。

次に米の概念についてです。京畿道以南の地方でいう米は、大米つまりコメです。しかし平安道における米の概念は粟です。この論文を作成される際にはこのような違いまでも意識してくださると、もっとよいと思います。なぜならば、粟と米の給食能力にはかなりの差があるからです。

3点目は軍糧の計算上の問題です。朝鮮の軍人は1.5升の食料を供給されることになっています。この食糧は、カロリーでは1980キロカロリーぐらいの熱量になります。これは戦闘という重労働を賄うには不足する量です。一方、もし明軍に1升の食糧を支給するとしたら、これは基礎代謝量程度の分量にしかありません。このような点を考慮しますと、当時の軍糧支給問題についての再考ないし再検討が必要なのではないかと思います。

次は馬糧についての問題です。馬糧についてはここでは直接に取り扱ってはいませんが、今後はこの問題についても注目していただきたいと思います。青草のない冬の時期には馬豆が重要です。この馬豆は軍糧の一部として、軍糧と対等に取り扱われるべきだと思います。以上いくつかご指摘しましたが、意見をお聞かせいただければと思います。

孫承詒 出来るだけ短答式にお答えください。

六反田 わかりました。まず最初の問題、軍糧の消費先用途の問題ですね。これについては確かに私の関心としては、調達と輸送ということの問題関心を持ってやっていますが、その消費先としては、ここでは具体的には朝鮮官軍、初期のころは朝鮮官軍が対象で、6月十何日以降になると明軍を主としての対象にしての議論なので、一応そういうかたちでは論じたつもりです。もう少しご指摘のようにどのように消費されていくのかということも視野に含めたいと思います。

それから時代区分の問題ですが、確かに全体の時期区分を設定した上で研究をすべきだというご意見、大変ありがとうございます。これについてはしかし、それ自体に対して私は見解をすべきだったのかもしれませんが、金鎔坤さんが既に全体を見通したものが一応ありまして、私はあまりそういうものにこだわらずに、とにかく初期から順番にひたすら資料を追いかけていくという非常に古典的な手法でそれを取ったので、ここではわりと区分の問題は論じませんでした。それによって積み重ねていけば、いずれ時期区分の問題もある程度見えてくるだろうという想定の下にやりましたが、そういうやり方がまずいというのであれば、また少し考えたいと思います。

ただ、開戦初期を扱ったというのは、もちろん時間的な問題もあったわけですが、ただこの私が扱った時期というものはおそらくこれまでの研究ではほとんど論じられていない。明軍の問題を扱う場合も李如松が朝鮮にやってきて以降の問題は非常に集中的に論じられていますが、初期の問題というのはほとんど研究が穴になっていたと思いましたので、ややそこを詳しく論じるという意図はありました。

それからお米の問題です。皮のついているとか、ついていないという問題は確かにありまして、私も大変注意しなければいけない問題だと思います。ただ、これは史料的な

限界でして、分かるものについては私も全部書いてあると思います。白米とか造米とか田米と一応書いてあると思います。あとは要するに、史料に石とか米とかと出てこない。これはそれ以上判断する材料がないので、大変困っています。何かいい史料があったら教えていただきたいと思います。馬糧の問題も同じでして、少なくともこの私が扱った時期は、馬糧について論じた記事というのはあまりなくて、どこか1カ所、どの史料だったか忘れましたが、馬糧の問題を論じたのがあったと思います。そのくらいしかこの時期は、馬の食べ物については議論がないんです。ないかどうか分からないのですが、少なくとも今回実録しか見ていませんので、実録の中になくて、そこは書けなかったというだけの話であります。もちろん、馬糧の重要性ということも十分認識しているつもりです。

あと、すみません、もう長くなるのでやめますが、その軍糧の計算で1升5合、1980キロカロリーというのは多いか少ないかという問題です。これについては、軍糧といってもいろいろな軍隊の動き方によって状況が異なる、駐屯している時、軍隊が進軍している時、実際戦争して戦っている最中と、いろいろ状況があると思いますしはつきりと私は分かりません。私はとにかく軍事関係は本当に今回初めて扱いましたので、分からないことだらけで手探りでやっていますので、どなたかこういう問題に詳しい方がいれば、このくらいが適当なんだと、是非この機会にいろいろ教えていただきたいと思います。ありがとうございました。

孫承喆 答弁に対するご質問もあるかと思いますが、あとで時間があればお願いすることにして、まず他の方にご発言いただきます。

私も簡単に質問させていただきます。まず先行研究の批判と考察に関する部分について申し上げます。発表者は3編の論文を紹介してくださいました。日本人の研究者として韓国の先行研究をすべて検討するには限界があると思いますが、実際にこの3編以外にも多くの論文があります。その代表的なものとして張学根、金弘の博士論文、宋亮燮等の論文があります。そのリストを作ってきたので後ほど差し上げたいと思います。それでこの3編の論文のみによって論旨を展開する場合には問題が生じる可能性もあり、また先生が引用された『宣祖実録』の諸史料は、すでに他の論文においても多数引用されているので、史料引用の斬新性において多少問題があるのではないかと思います。

それから、開戦初期の軍糧に関する論議がはじめて記されたのは、史料Aの宣祖25年5月13日だと先生はおっしゃいましたが、『宣祖実録』によりますと既に5月6日に軍糧に対する論議が行われています。ご確認いただければと思います。もう1点だけ申し上げますと、開戦初期に集中して軍糧の供給体制を研究されたという点で、相当な意義があると思います。しかし、先ほど鄭求福先生からも指摘がありましたが、韓日共同研究委員会で発表する論文ですので、可能であれば委員会の目的にしたがって両国間の学説や解釈に違いがある主題について、または相互理解と認識を深める論旨が強調されればと思います。例えば、戦争の侵略的な性格であるとか、朝鮮の被害、戦争の影響な

どに関する問題について省察し、現在問題になっている歴史教科書をめぐる両国間の葛藤を解消する契機となればと希望しております。

六反田 どうもありがとうございました。今、目録をいただきました。こんなにあるんですね、驚きました。私は韓国側で作った研究史の整理に挙がっているものは見たのですが、これはそれからも落ちているのだと思いますので、そちらのほうも補充する必要があるのではないかと思います。これはまた、検討させていただきます、どうもありがとうございました。それから資料A以前にあるということもありがとうございます。私ずっと見たつもりだったんですけれども、落ちていたかもしれません。今度検討させていただきたいと思います。ありがとうございました。

それから最後の問題ですけれども、確かにこの委員会の趣旨からしてもう少し日韓の学会で意見の対立があるようなものについて、この研究委員会で扱うべきであってそれがよくこの日本の教科書なんのでしょうか、こういう問題に資するところがあるのではないかというご意見、その通りだと思いますが、ただ私は1つ思ったのはこの軍糧問題を取り上げた理由は幾つかありますがその1つはこの問題が今まで日本では研究されていない。韓国で研究されている。それだったら問題だと思ったのです。ですから、私は日本側として、では、この問題をどういふふうに論じていくのかということ、もちろんそれができているとは思いますが、少しだけやってみようかと思って取り上げたということで、そういう意味では趣旨から言うとそれがうまく伝わらないところもあったかと思いますが、一応私の考えはそういう考えです。

ですから何であれ、日本側の研究した成果の中でこういう問題が日本でやられていないから課題だということをたしか書いていたと思います。それに基づいて、これを取り上げたということにして、うまくその趣旨が伝わらなかったとしたらそれは申し訳ないと思いますが、一応ご理解いただければと思っています。

孫承喆 よくわかりました。韓国側の壬辰倭乱研究史も十分に整理ができていけませんので、引き続き修正を加えていきたいと思っています。時間がございませんので、朴哲暁先生簡単に5分以内をお願いします。

朴哲暁 朴哲暁と申します。これまで諸先生方が指摘をしてくださしまして、重複する部分もありますので、簡単に補足をして、また私の指摘も少ししたいと思っています。他の先生方もご指摘されましたが、研究範囲と対象について私もやはり疑問があり意見もあります。しかし、既に他の先生方が指摘されましたし、それらの指摘に関してこれから補完していくことですので、関連の内容について簡単に述べたいと思います。

研究時期の決定において一番重要なのは、戦争の状況だと思います。したがって戦争の状況を考慮して時期が決定されなければならないと思います。実際に朝鮮軍は、開戦初期に対応不在の状態でしたので、連敗を重ねました。しかし、義兵が出てきたり、水軍の活動によって戦列を立て直し、それらを通して軍糧供給体系も整備されたものと思われます。そのような部分について積極的な考慮が必要だと思います。また空間的な

部分についても、中央政府の対応だけでなく、第一線の指揮官たちも独自の供給体系を持っていたのではないかと思います。そのような部分についての積極的な検討も含めて時期区分を行えば、この論文を修正される際、よりよいものになるであろうと思います。

次に些細な問題についていくつか申し上げたいと思います。論文の6頁(最終報告書236頁)に出ている開戦の日付が、日本の暦によるものでないのであれば修正しなければならないと思います。4月13日となっていますが、実際に戦闘が行われたのは4月14日ですので、修正が必要だと思います。次に7頁の上段(最終報告書238頁)にある宣祖25年5月13日付の「実録」記事に関する内容です。記事の内容から、当時の牙山倉の漕運船団に積み込まれていた田税米が1200石だと断定しています。しかし、当時の税穀米全体の規模を考えるととても大きな量であったのではないかと考えられますし、実録の記事は一般的な海路を通じてその程度の量を運搬したというものであるため、そのような部分についての検討が必要だと思います。そして9頁上段(最終報告書241頁)に、「北上する日本軍に備えるため、黄海道・江原道の漕倉穀を活用した」との記述があります。しかし当時の状況は5月2日に漢城が陥落し、朝鮮軍が退却する際、日本軍の利用を妨げるため各地の田税穀を焼却したりして保存されることが困難だったため、文献上の記録だけを根拠として、円滑に活用することができたとするのは無理があると思います。以上の点について筆者の見解やご意見を伺えればと存じます。

六反田 色々ありがとうございます。特にご専門の方なので大変貴重な意見だと思います。最初の時期区分の問題からお答えいたします。時期区分は戦闘の状況に応じてなされなければならないとおっしゃいました。その通りだと思います。私はここで初期を扱ったんですが、これはこれでまとめた時期として区分できると私は思っていますので、ここで切ったわけでした、これが時期として設定できるかできないかという点については研究者によって見解の相違はあるかと思います。私はひとまずこのように考えて、李如松が入ってきてからはまた大きくかわってくると思いますので、とりあえずここまでということで区分しております。

それから暦の問題ですが、これは私が間違っているかもしれません。もう一度確認いたします。それから資料Aに関する問題ですが、牙山倉の米を1200石とすることが問題だということですが、これは後に出てくる資料Lなどに出てきますので、そこからそのように判断しております。ですから資料Aはもう少し一般的な話をしているのだという議論もあるかもしれませんが、ただ時期的にみてこの時期、漕運の時期としてはずいぶん遅い時期で、大部分のもの漢城についていたかもしれないし、だから1200石というのはかえって少ないですね。無理をしたら漕運船一隻に積めるかもしれない、1000石から積めますよね。だから漕運船団ということばも不適切かもしれないんですが、後の方の資料に柳成龍などが言及している船がおそらく資料Aで扱っているものと同一だろうという判断のもとで、ここではこういうふうにしています。これについてはもう少し関連の資料を

探して検討したいと思います。

それから黄海道などの漕倉の穀物を本当に活用したといえるのかというご指摘ですが、これはなかなか難しいところだと思います。ただ、史料をみますと具体的にどこどこの倉庫に何千石あると、それでこれは、おそらくまったくの机上の空論ではなくて何らかの情報をもとにしていると思います。実際にそれがすべて利用されたかどうかはわかりませんが、確認するすべがないので質問されると困ってしまいますが、ある程度の確実な情報をもとに政府は動いていたのではないかと思いますし、ここではこれぐらいに止めまして、関連の史料を探して私の論を補強できるようなものがあれば補強したいと思いますし、どうも無理があるということであれば、考えます。ご指摘ありがとうございます。

孫承喆 韓文鐘先生、1分をお願いします。

韓文鐘 簡単に一つだけ伺います。六反田先生の発表では韓国側研究者3人の研究の限界を指摘してくださいました。先生が指摘された限界について、今回の発表で具体的に究明された点や既存の研究との相違点を、より明確に整理していただければと思います。

六反田 私は個々の研究について細かい問題があるということも指摘していますが、ただ私は全体を通してどういう課題があるかということをここでは問題にしていますので、全体として大きく二つの課題があるということを示して、そのうちの一つについて、ここで非常に短くて中間報告的で申し訳ないんですが、少し検討を試みてみたというのが私の研究ですので、そうにご理解いただければと思います。もちろん個々の問題を具体的に指摘しろといわれれば、今日は残念ながらうっかりして論文をもつてこなかったなのでここではできませんが、具体的に指摘することはもちろん可能です。それについて必要であればこの論文に盛り込むこともできると思います。そのへんも考えてみたいと思います。今日のところはこれぐらいでお許ください。

孫承喆 討論は正確に70分行いました。12時までの予定でしたが少し遅くなって今12時10分です。それではこれから1時半まで休憩にいたします。午前の間お疲れ様でした。